

第172図 55号竪穴住居跡出土遺物

55号竪穴住居跡出土遺物(第172図 1~4)

1・3は甍形土器の口縁部である。口唇部の形状は舌状になる。2は甍形土器の肩部で一条の突帯を有している。頸部から口唇部にかけて、内湾していくタイプのものと考えられる。4は甍形土器の底部である。底部外面の形状は、平坦になっている。

56号竪穴住居跡(第173図)

C-33・34区、Ⅲa層で検出した。形状は不定形である。北側は53号住居、東側は54号住居、西側は55号住居と切り合い関係にあり、残存している部分が少なく、北側と西側の壁面が確認できた。埋土を掘り下げていく過程で不定形の色の違うプランを確認し、掘り下げていくと住居の床面と思われる硬化面を確認することができた。上面は削平を受けており、検出面から床面までの深さは約20cmと浅い。

4基のピットが検出された。それぞれのピット間の距離は、P1→P2が約150cm、P2→P4が約90cm、P3→P4が約180cm、P3→P1が約105cmである。これらのピットの中でピット3とピット4は、壁面に沿って直線上に並ぶ形で位置しており、この住居に伴う柱穴になると考える。

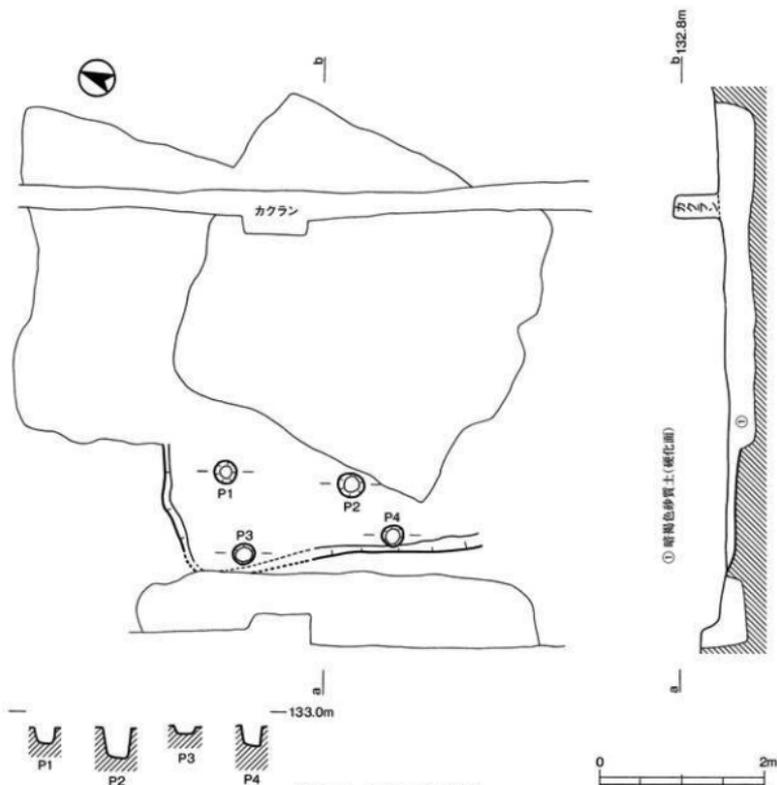
遺物は、成川式の甍形土器が出土し、接合作業等を経て1点を図化した。

56号竪穴住居跡出土遺物(第174図 1)

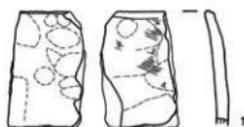
1は甍形土器の口縁部である。口唇部が舌状になり、内湾していく器形をしている。調整は内外面ともナデで調整されており、指オサエの痕が窺える。

第46表 55・56号竪穴住居跡出土遺物観察表

検出 住居 NO	番号	器種	部位	口径 OR	底径 OR	器高 OR	調整・文様		色調		胎土	備考	
							外面	内面	外面	内面			
172	55	1	甍	口縁部	-	-	-	ナデ	ナデ	黒褐色	明褐色	石英、長石、角閃石	-
		2	甍	肩部	-	-	-	ナデ・指オサエ	ナデ	赤褐色	黒褐色	石英、長石、角閃石	-
		3	甍	口縁部	-	-	-	指ナデ	ナデ	黒褐色	にぶい赤褐色	石英、長石、角閃石	-
		4	甍	底-胴部	-	10.7	-	ナデ	ナデ	赤褐色	にぶい赤褐色	石英、長石、角閃石	-
174	56	1	甍	口縁部	-	-	-	ナデ	ハケム後ナデ	黒褐色	にぶい褐色	石英、長石	-



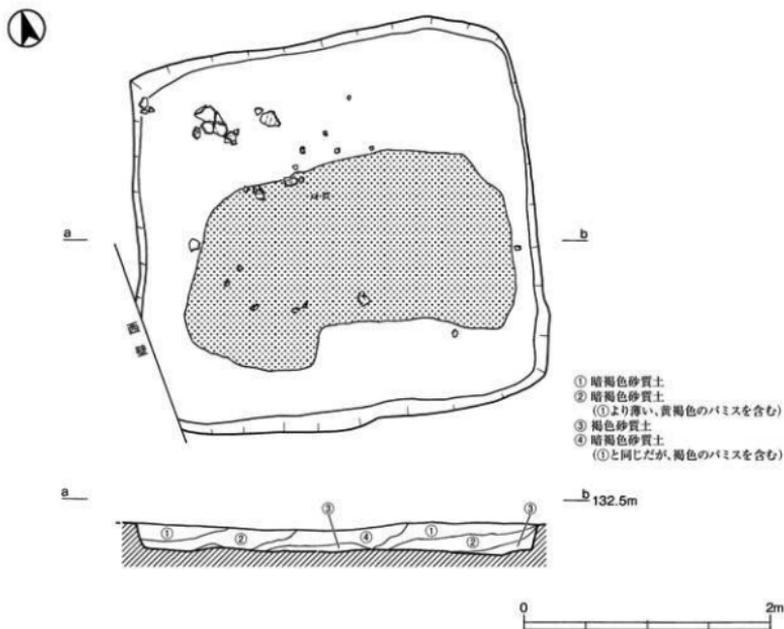
第173図 56号竪穴住居跡



第174図 56号竪穴住居跡出土遺物

第47表 57号竪穴住居跡出土遺物観察表(1)

調査番号	住居NO	遺物番号	器種	部位	口径 cm	底径 cm	器高 cm	調整・文様		色調		胎土	備考	
								外面	内面	外面	内面			
176	57	1	甕	胴部	—	—	—	ナデ	ナデ	にぶい赤褐色	明赤褐色	石灰、長石	—	
		2	甕	胴部	—	—	—	ナデ	ナデ	にぶい赤褐色	にぶい黄褐色	石灰、長石、角閃石	—	
		3	甕	底→胴部	—	6.8	—	—	ナデ	ケズリ後ナデ	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	石灰、長石、角閃石	—
		4	甕	口縁→胴部	—	—	—	—	ナデ	ナデ強圧痕	にぶい赤褐色	明赤褐色	石灰、長石、角閃石	—
		5	甕	底部	—	—	—	—	ナデ	ナデ	明赤褐色	明赤褐色	石灰、長石、角閃石	—
		6	甕	口縁部→胴部	—	16.3	—	—	ナデ	工具ナデ	赤褐色	にぶい赤褐色	石灰、長石、角閃石	—
		7	甕	胴部→胴部	—	—	—	—	ミガキ・ナデ	ナデ	濃褐色	にぶい赤褐色	石灰、長石、角閃石	—
		8	甕	胴部	—	—	—	—	ミガキ	指ナデ	明赤褐色	にぶい赤褐色	石灰、長石	竹葉文
		9	甕	胴部	—	—	—	—	ナデ	ナデ	赤褐色	赤褐色	石灰、長石、角閃石	—
		10	甕	胴→胴部	—	—	—	—	ナデ強圧痕	ナデ強圧痕	明赤褐色	褐色	石灰、長石、角閃石	—



第175図 57号竪穴住居跡

57号竪穴住居跡(第175図)

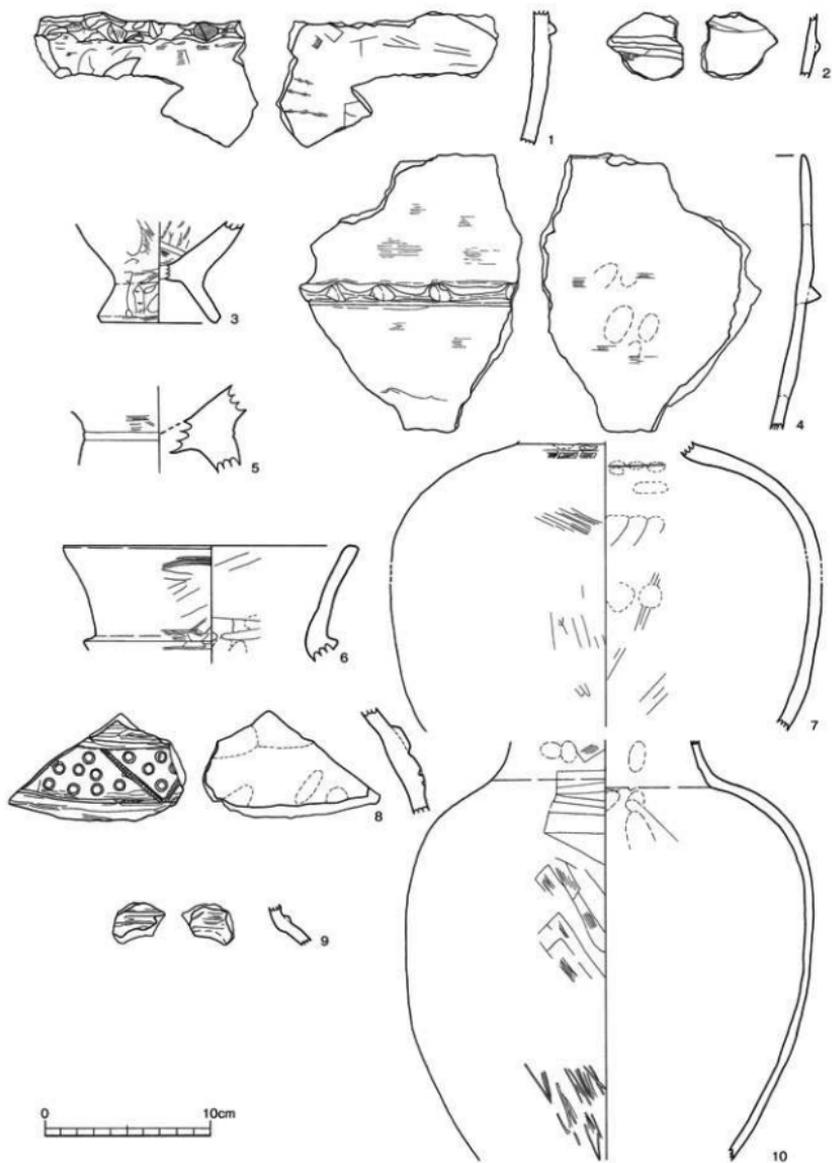
C-35区, III a層で検出された。この区の周辺は、圃場整備のため、古墳時代の包含層であるIII層は削平を受けている。形状は長軸約338cm×短軸約322cmの方形である。上部が削平されており、側壁は約20~25cmと比較的浅い。埋土観察のベルトを設定して中央から床面を確認しながら掘り下げた。中央部にこの住居の床面と思われる硬く締まった貼り床が明瞭に残存していた。

出土遺物は、この住居の床面に付着する形で、成川式土器が出土していた。また、この住居の埋土内からは、鉄製の雁股鎌が1点出土した。出土遺物は小片が多く接合作業等を経て、19点を図化した。

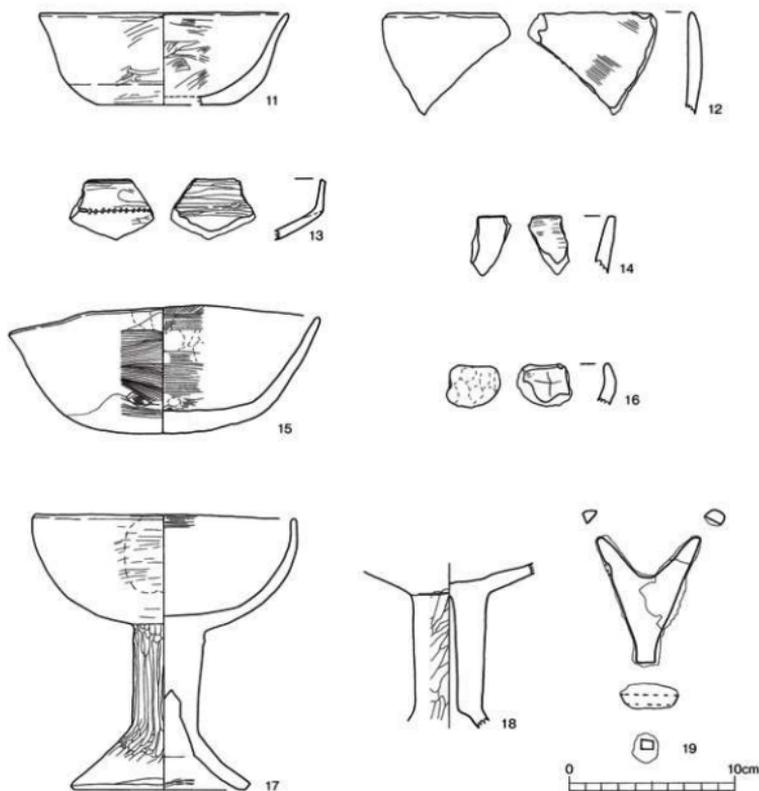
57号竪穴住居跡出土遺物(第176図・177図 1~19)

1~5は甕形土器である。4は口縁部までそろっている。1・2・4は一条の絡縄突帯が施されている。突帯の調整はヘラ刻みによる調整である。3・5は底部である。

6~10は壺形土器である。6は口縁部で、口唇部の形状は平坦である。8は幅広の突帯を有しており、外面には竹管文が施されている。11~13・15は鉢形土器である。器面調整はナデである。15は縁を注口状に若干変形させており、他の鉢とは特異な形状をしている。液体物か何かを注ぐために使用したことが窺える。17・18は高坏である。17は完形で器面調整は外面はよく研磨されている。18の外面の色調は黒色で表面をよく研磨している。19は鉄製の雁股鎌であり、



第176图 57号竖穴住居跡出土遺物(1)



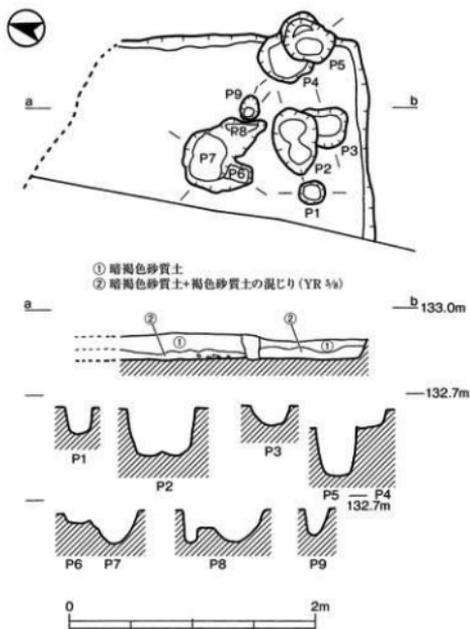
第177図 57号竪穴住居跡出土遺物(2)

8 cmと大型の部類に入るものである。儀式用に使われたものと考えられる。

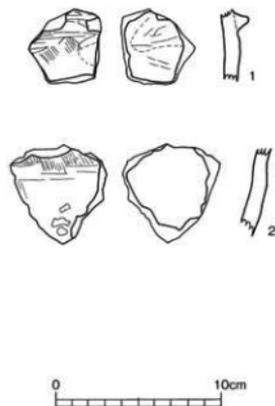
第48表 57号竪穴住居跡出土遺物観察表(2)

検出 住居 NO	番号	器種	部位	口径 cm	底径 cm	器高 cm	調整・文様		色調		胎土	備考	
							外面	内面	外面	内面			
177	57	11	鉢	口縁～底部	15	—	—	ナデ	ナデ	にぶい黄緑	にぶい黄緑	石英、長石、角閃石	—
		12	鉢	口縁部	—	—	—	ナデ	ナデ	赤褐	にぶい赤褐	石英、長石、角閃石	—
		13	鉢	口縁部	—	—	—	ミガキ	ミガキ	橙	黒褐	石英	—
		14	高坪	坪部	—	—	—	ミガキ	ミガキ	赤褐	にぶい赤褐	石英、長石、角閃石	赤色顔料
		15	鉢	底部	18.6	0.5	7.8	ナデ	ナデ	橙オリーブ、ハケメ	橙	石英、長石、角閃石	—
		16	ミニチュア	口縁部	—	—	—	ナデ	ナデ	橙	橙	石英、長石、角閃石	—
		17	高坪	底部	15.7	0.6	16.8	ミガキ	ナデ	橙	橙	石英、長石、角閃石	—
18	高坪	胴部～脚部	—	—	—	ミガキ	ナデ	黒褐	にぶい黄緑	石英、長石、角閃石	—		

検出 住居 NO	番号	器種	材質	最大長	最大幅	最大厚	重量 g	備考
				cm	cm	cm		
177	57	19	雑器類	8	(5.8)	1.8	60.37	—



第178図 58号竪穴住居跡



第179図 58号竪穴住居跡出土遺物

58号竪穴住居跡 (第178図)

C-35区、Ⅲa層で検出された。形状は長軸約240cm×短軸約140cmの不定形である。西側の一部は調査区外であるため一部分しか確認できなかった。この区の周辺は圃場整備のため、古墳時代の包含層であるⅢ層は削平を受けており、この住居も上部は削平を受けており、検出面からの床面までの深さは約20cmと浅かった。床面には、この住居の床面と思われる硬くしまった貼り床が明瞭に残存していた。

この住居から、9基のピットが検出された。9基のピットのうち5基は、径が約40cm前後と比較的大きい。P3とP7は、他の住居跡から検出されたものと同じような形状をしており、また直線上に並び、距離も約100cmである。このP3とP7はこの住居に伴う柱穴である可能性が高いと考える。

出土遺物は成川式の土器片が出土し、接合作業等を経て2点を図化した。

58号住居出土遺物 (第179図 1・2)

1は甕形土器の胴部である。胴部には一条の突帯が貼り付けてあり、突帯の形状は断面三角形を呈する。2は甕形土器の頸部から胴部である。頸部外面に掻き上げがある。

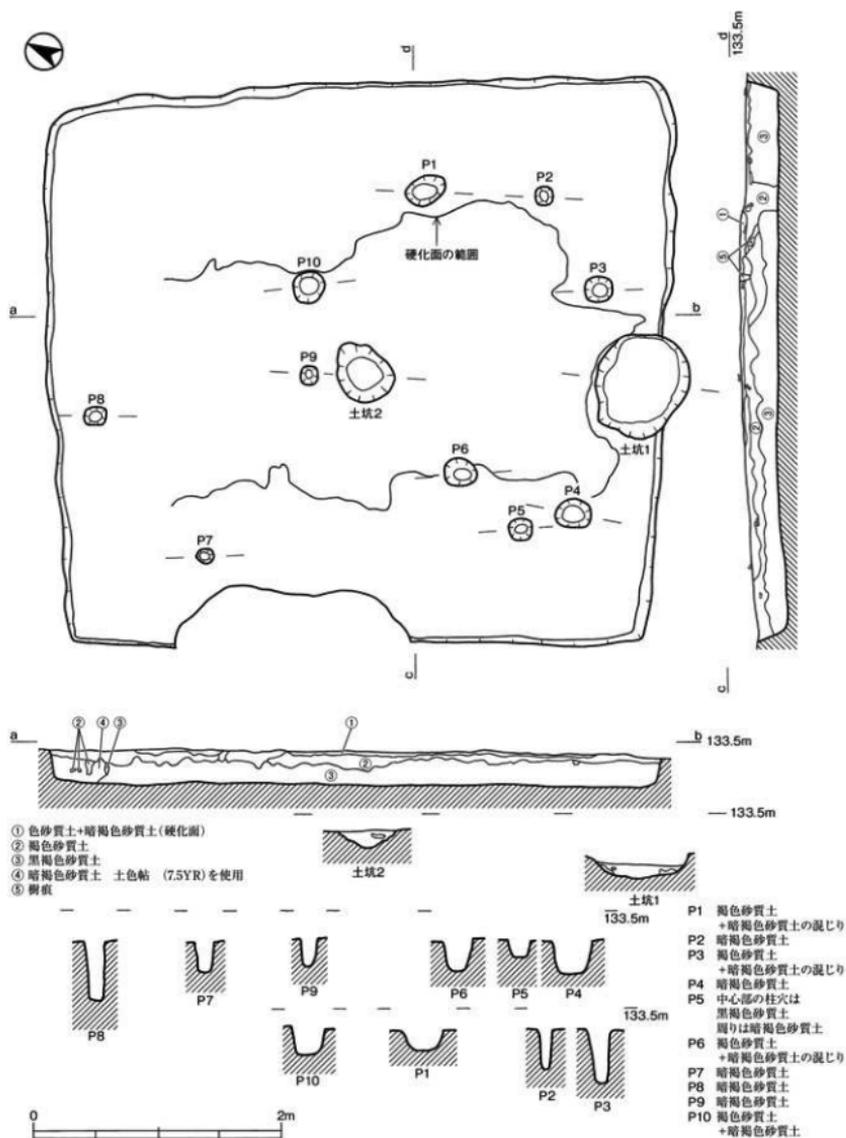
59号竪穴住居跡(第180図)

B-36区、Ⅲa層で検出された。形状は一辺が約520cm×約480cmの長方形である。西側は削平を受けており、全てのプランを検出することはできなかった。埋土の掘り下げの過程で、色の違う方形のプランを確認し、埋土観察ベルトを設定し、中央から床面を確認しながら掘り下げていくと、この住居の床面と思われる硬くしまった貼り床を確認することができた。中央部には、直径約50cmの炉跡と思われる土坑が検出された。検出面から床面までの深さは約28cmである。また、南側からは直径約80cmの土坑状のプランも認められた。

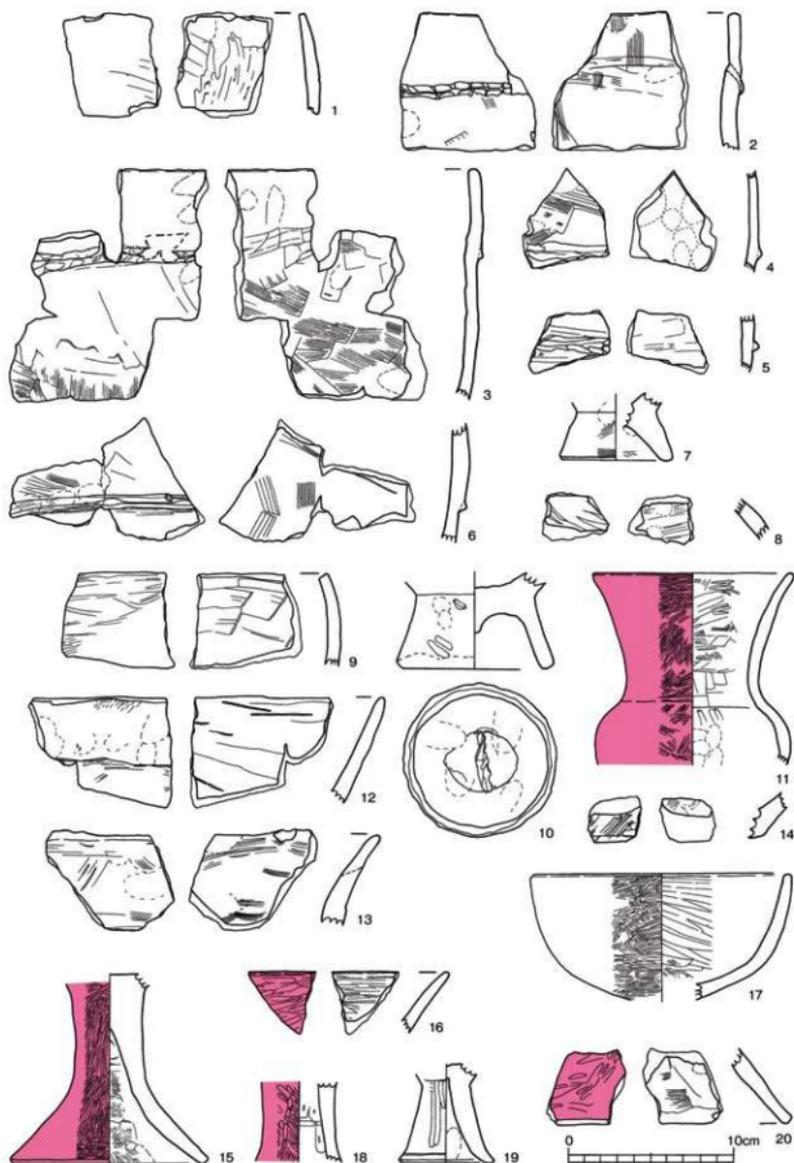
この住居からは、10基のピットが検出された。それぞれのピット間の距離は、P1→P2、P2→P3が約100cm、P4→P5が約60cm、P5→P6が約80cm、P6→P7が約220cm、P7→P8が約140cm、P8→P9が約180cm、P8→P10が約200cm、P10→P1が約120cmである。これらのピットの配列は、直線上に並ぶ。また、断面の形状も類似しているものが多い。以上のようなことから、これらのピットはこの住居に伴う柱穴の可能性が高いと考える。

59号竪穴住居跡出土遺物(第181図 1～20)

1、2、3は甕形土器の肩部～口縁部である。2、3は外面に突帯を貼り付けている。器形は三者とも、口縁部が口唇部にかけて内湾していくものである。2は内面にはっきりとした稜線があり、肩部から口縁部にかけて粘土をはりつけて形成している接合痕がよくわかる資料である。調整は、1～3は内外面ともナデで調整されており、胎土は、石英、長石、角閃石を含んでいる。4～6は甕形土器の胴部であり突帯が一条ある。三者とも、指つまみ状の突帯で貼り付けてある。調整は内外面ともナデで調整されている。7・10は、甕形土器の底部である。調整はナデで底部内面には指でつまみ出した痕が残る。9・12は鉢の口縁部である。9は胴部から口縁端部に向かってやや内湾していく器形で12はやや外側に開く器形である。調整は、両者ともナデによる調整であるが、内面には工具によるナデ調整の痕が顕著に残る。13は壺形土器の口縁部である。器壁は厚い。11は長頸壺である。調整は、内外面ともにミガキによる調整で、特に外面には赤色顔料が塗られている。16は高坏の坏部で内外面ともにミガキによる調整である。外面には赤色顔料が塗布されている。18・20は高坏の脚部である。内面はナデで外面はミガキによる調整で赤色顔料が塗布されている。15・19は高坏の脚部～筒部である。調整はどちらもミガキである。15の底面は、ラッパ状に開く器形で外面に赤色顔料が塗布されている。17は高坏の坏部であり、形状は鉢形土器に酷似している。調整は、内外面ともにミガキである。外面は、赤色顔料が塗布されている。



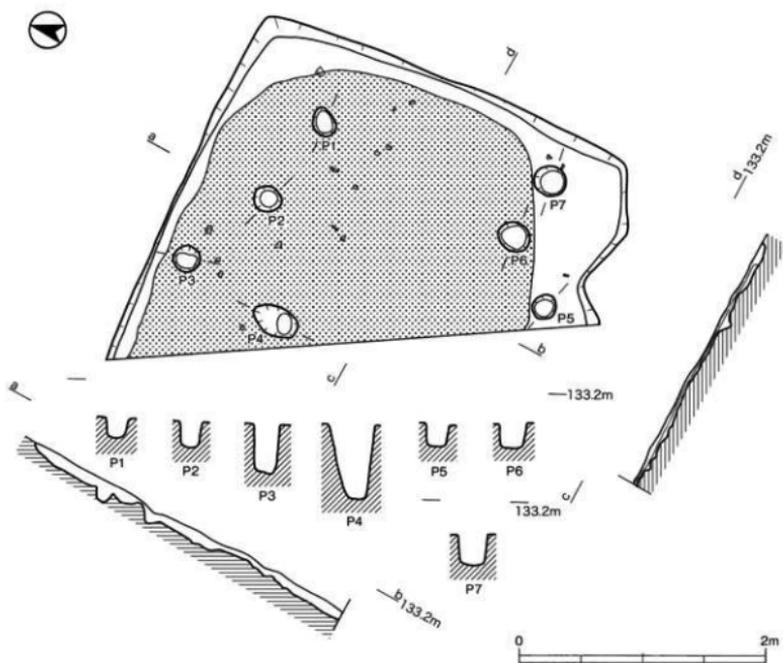
第180図 59号竪穴住居跡



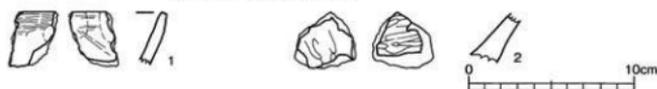
第181图 59号竖穴住居跡出土遺物

第49表 58～61号竖穴住居跡出土遺物観察表

神区	住居 NO	番号	器種	部位	口径			器高		調整・文様		色部		胎土	備考
					cm	cm	cm	外面	内面	外面	内面				
179	58	1	甕	胴部	—	—	—	ナデ	ナデ	に深い赤褐色	縹	石灰、炭石、角閃石	—		
		2	甕	胴部	—	—	—	ナデ	ナデ	に深い赤褐色	縹	石灰、炭石、角閃石	—		
181	59	1	甕	口縁部	—	—	—	ナデ	ミガキ	に深い赤褐色	赤褐色	石灰、炭石、角閃石	—		
		2	甕	口縁部	—	—	—	ナデ	ナデ	縹褐色	赤褐色	石灰、炭石、角閃石	—		
		3	甕	口縁部	—	—	—	ナデ	工具ナデ、指オサエ	赤褐色	に深い赤褐色	石灰、炭石、角閃石	—		
		4	甕	胴部	—	—	—	ナデ	指オサエ	縹赤褐色	に深い赤褐色	石灰、炭石	—		
		5	甕	胴部	—	—	—	ナデ	丁寧なナデ	灰褐色	明赤褐色	石灰、炭石、角閃石	—		
		6	甕	胴部	—	—	—	ナデ	工具ナデ	縹赤褐色	明赤褐色	石灰、炭石	—		
		7	甕	底部	—	6.4	—	ナデ	指オサエ	灰褐色	灰褐色	石灰、炭石、角閃石	—		
		8	甕	胴部	—	—	—	ナデ	指オサエ・ナデ	縹褐色	縹	石灰、炭石、角閃石	—		
		9	鉢	口縁部	—	—	—	ナデ	工具ナデ	縹赤褐色	明赤褐色	石灰、炭石、角閃石	—		
		10	甕	底部～胴部	—	8.6	—	ナデ	ナデ	赤褐色	縹赤褐色	石灰、炭石、角閃石	—		
		11	長頸壺	口縁～胴部	12.2	—	—	ミガキ	ナデ・ミガキ	赤褐色	赤褐色	石灰、炭石、角閃石	赤色顔料		
		12	鉢	口縁部	—	—	—	ナデ	工具ナデ	赤褐色	赤褐色	石灰、炭石、角閃石	—		
		13	甕	口縁部	—	—	—	ナデ	ミガキ、指オサエ	赤褐色	赤褐色	石灰、炭石、角閃石	—		
		14	鉢	底部	—	—	—	ミガキ	ナデ	赤	に深い縹	石灰、炭石、角閃石	赤色顔料		
		15	高坪	胴部	12	—	—	ミガキ	ケズリ・ナデ	赤	に深い縹	石灰、角閃石	—		
		16	高坪	坪部	—	—	—	ミガキ	ミガキ	赤	縹	石灰、炭石、角閃石	—		
		17	高坪	坪部	15.6	—	—	ミガキ	ミガキ	縹赤褐色	縹赤褐色	石灰	赤色顔料・煤片層		
		18	高坪	胴部	—	—	—	ミガキ	ミガキ	赤	に深い赤褐色	石灰、炭石	赤色顔料		
		19	高坪	胴部	—	5.8	—	ミガキ	ナデ	明赤褐色	明赤褐色	石灰	—		
		20	高坪	胴部	—	—	—	ミガキ	指ナデ	赤	に深い縹	石灰、炭石、角閃石	赤色顔料		
183	60	1	鉢	口縁部	—	—	ナデ	指オサエ・ナデ	赤褐色	赤褐色	石灰、炭石、角閃石	—			
		2	甕	胴部	—	—	ミガキ	ミガキ	縹褐色	に深い縹	石灰、炭石、角閃石	—			
186	61	1	甕	口縁部	—	—	ナデ	ナデ	赤褐色	赤褐色	石灰、炭石、角閃石	—			
神区	住居 NO	番号	器種	石材	最大長 cm	最大幅 cm	最大厚 cm	重量 g	備考						
186	61	2	磨石・基石	砂岩	11.6	7.7	4	472	—						



第182図 60号竪穴住居跡



第183図 60号竪穴住居跡出土遺物

60号竪穴住居跡 (第182図)

B・C-36区、Ⅲa層で検出した。形状は長軸約280cm×短軸約230cmの不定形である。西側には、落ち込み部分があり、プラン全体を確認することはできないが、方形プランになるのではないかとと思われる。この区の周辺は崩壊整備のため、古墳時代の包含層であるⅢ層は削平を受けており、この住居も上面部は削平を受けており、検出面からの床面までの深さは約10cmと浅かった。

床面は硬くしまった貼り床が、明瞭に残存していた。

7基のピットが検出された。それぞれのピット間の距離は、P1→P7が約200cm、P7→P6が約60cm、P6→P5、P3→P2、P2→P1が約80cmである。P4→P5が約220cm、P4→P3が約100cmである。これらのピットの配列は、床面の貼り床縁辺部に位置しており、また直線上に並ぶものもある。このようなことから、これらのピットは、この住居に伴う柱穴の可能性が高いと思われる。

出土遺物は、土器片が出土したが小片遺物が多く接合作業等を経て器種が判別できる2点を図化した。

60号竪穴住居跡出土遺物(第183図 1・2)

1は鉢の口縁部である。胴部から口唇部にかけて、やや内湾する器形である。2は甕形土器の胴部片として報告する。調整は内外面ともにミガキで調整されている。

61号竪穴住居跡(第184図)

C-36区、Ⅲa層で検出された。形状は長軸約350cm×短軸約150cmの不定形である。西側は調査区外であり、62号住居と切り合い関係になっているため全体のプランを確認することはできなかった。方形のプランになることが推定される。埋土を掘り下げていく過程で色の違う、方形のプランが確認された。埋土観察のベルトを設定して、中央から床面を確認しながら掘り下げていくと、この住居の床面と思われる、硬くしまった貼り床を確認できた。検出面から床面までの深さは約29cmである。出土遺物は、小片遺物の土器片が多く、接合作業等を経て2点を図化した。

61号竪穴住居跡出土遺物(第186図 1・2)

1は、甕形土器の口縁部である。胴部と頸部の境界に突帯をもっている。頸部から口縁部にかけて、やや内湾していく器形である。胎土は、石英、長石、角閃石を含んでいる。調整は、内外面ともナデで調整されている。2は磨石・敲石である。表面に敲打痕が確認できる。

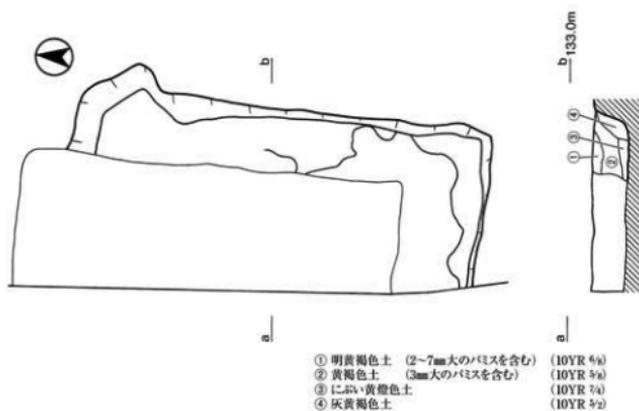
62号竪穴住居跡(第187図)

C-36区、Ⅲa層で検出された。形状は長軸約310cm×短軸約102cmの不定形である。西側は調査区外であり、61号住居と切り合い関係になっているため全体のプランを確認することはできなかった。方形のプランになることが推定される。埋土を掘り下げていく過程で色の違う、方形のプランが確認された。埋土観察のベルトを設定して、中央から床面を確認しながら掘り下げていくと、この住居の床面と思われる、硬くしまった貼り床を確認できた。検出面から床面までの深さは約25cmである。出土遺物は、成川式の甕形土器や壺形土器が出土し、接合作業等を経て11点を図化した。

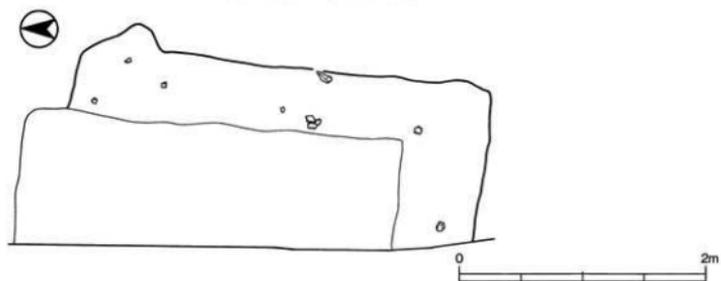
62号竪穴住居跡出土遺物(第189図 1～11)

1は甕形土器の口縁部で、肩部から口唇部にかけて内湾する奇形である。肩部に一条の突帯を有しており、突帯はヘラ刻みである。調整は内外面ともナデで調整されている。

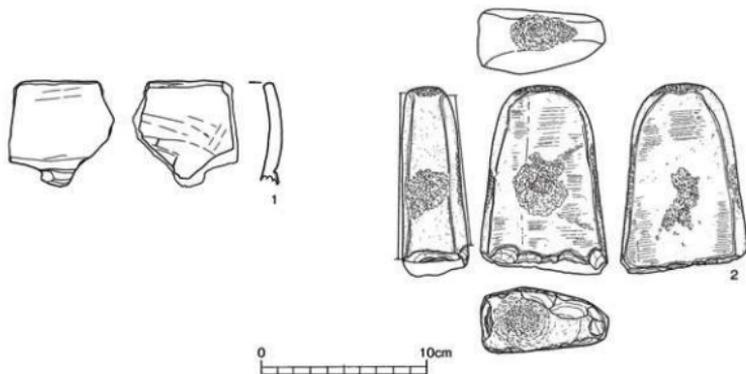
3は甕形土器の胴部で、一条の突帯を有する。突帯の調整は、指オサエである。1・2・7の胎土は、石英、長石、角閃石を含んでいる。4・8は壺形土器の肩部である。幅の広い突帯を有し、布刻みの調整があり、8には竹管文が施されている。8の内面は所々剥落している部分がある。5は小型丸底壺の口縁部～胴部である。調整は内外面ともにミガキである。6は小型丸底壺の頸部～口縁部であり、器形は口縁部が直立する。調整は内外面ともにミガキで調整されている。9は高坏の坏部である。調整は内外面ともにミガキで、外面には赤色顔料が塗られている。11はミニチュア土器である。小型の壺形土器で外面はミガキで調整してある。



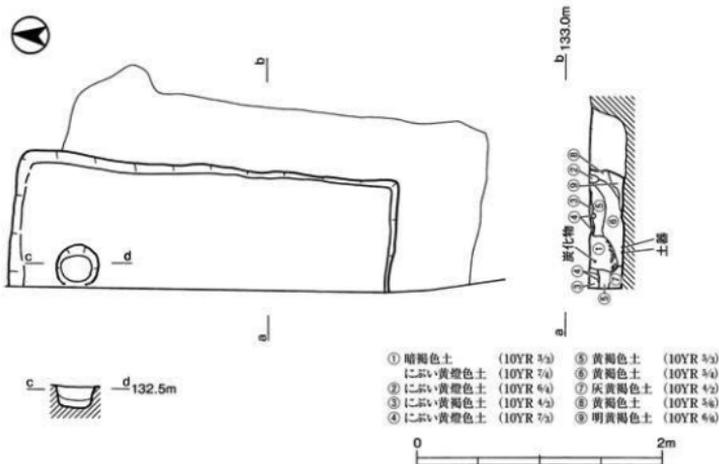
第184図 61号竪穴住居跡



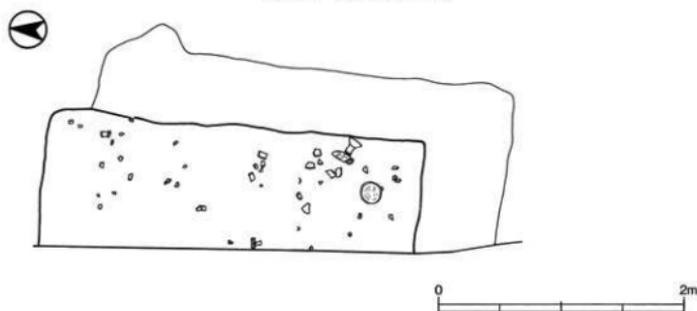
第185図 61号竪穴住居跡遺物出土状況



第186図 61号竪穴住居跡出土遺物



第187図 62号竪穴住居跡



第188図 62号竪穴住居跡遺物出土状況

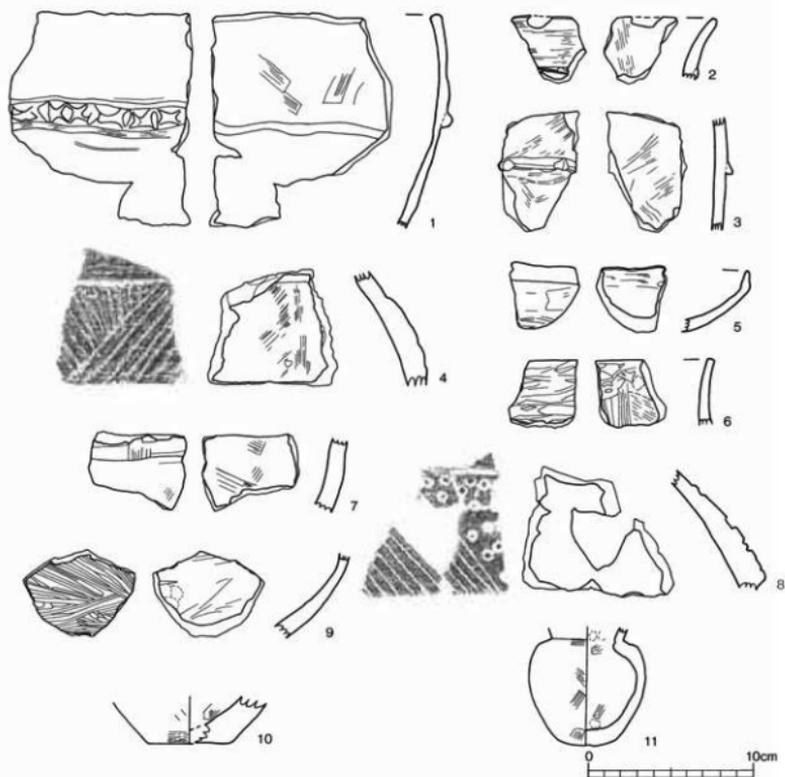
63号竪穴住居跡 (第190図)

A・B-35区、Ⅲa層で検出された。平面形は一辺が約300cm×約240cmの方形である。埋土を掘り下げていく過程で、方形の色の違うプランを確認した。埋土観察ベルトを設定して、中央から床面を確認しながら掘り下げていくと、この住居の床面と思われる硬くしまった面を確認することができた。この区の周辺は、圃場整備のため、古墳時代の包含層であるⅢ層は削平を受けており、この住居も上面部は削平を受けており、検出面からの床面までの深さは約20cmと浅かった。

出土遺物は、成川式の土器片が出土し、接合作業等を経て4点を図化した。

63号竪穴住居跡出土遺物 (第191図 1~4)

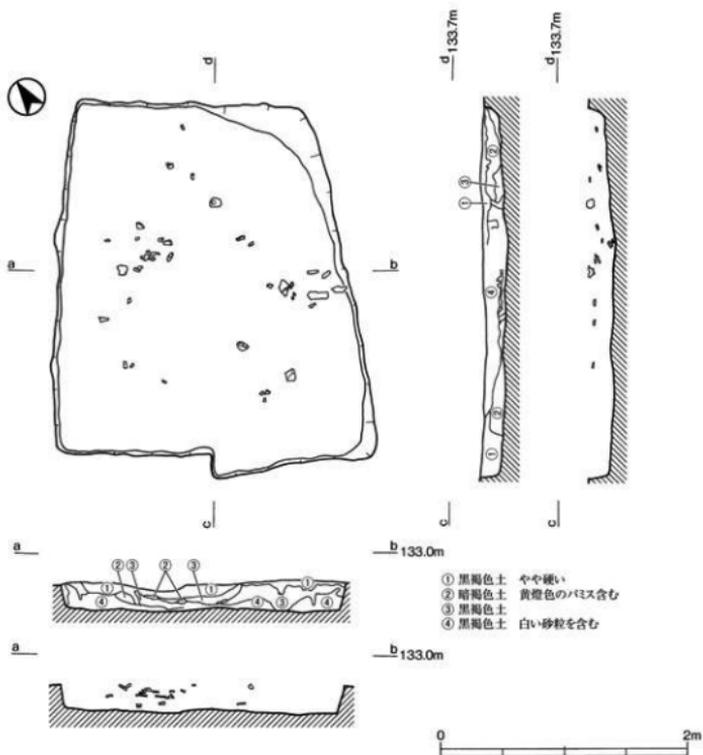
1は甕形土器の胴部~口縁部である。口縁部の形状は、平坦で、器形は口唇部がやや内湾する器形である。一条の突帯を有しており、棒状の工具で刻みの調整が施されている。



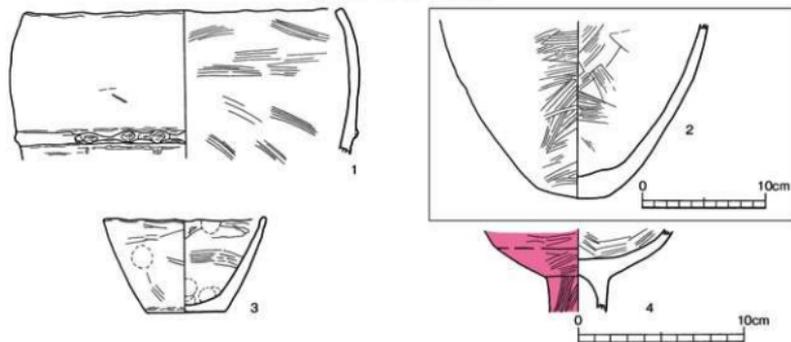
第189図 62号竪穴住居跡出土遺物

第50表 62・63号竪穴住居跡出土遺物観察表

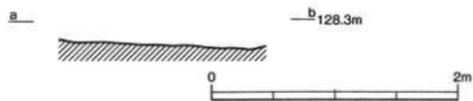
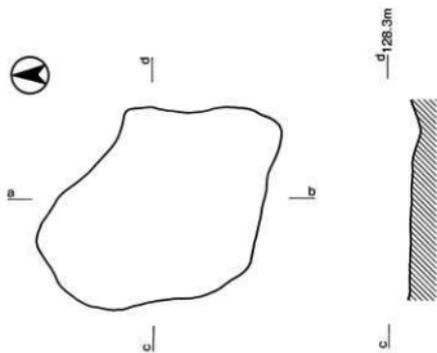
陣辺	住居 NO	番号	器種	部位	口径 OK	底径 OK	器高 OK	調整・文様		色図		胎土	備考
								外面	内面	外面	内面		
189	62	1	甕	口縁～胴部	—	—	—	ナデ	ナデ	暗赤褐色	赤褐色	石英、長石、角閃石	—
		2	甕	口縁部	—	—	—	ナデ	ナデ	にぶい褐色	にぶい褐色	石英、長石、角閃石	—
		3	甕	胴部	—	—	—	ナデ	ナデ	にぶい褐色	明赤褐色	石英、長石	—
		4	甕	胴部	—	—	—	ナデ	ナデ	暗赤褐色	赤褐色	石英、長石、角閃石	布目割突等
		5	小型丸底壺	口縁部	—	—	—	ミガキ	ミガキ	にぶい褐色	にぶい褐色	石英、長石、角閃石	—
		6	小型丸底壺	口縁部	—	—	—	ミガキ	赤キアゲ・ミガキ	赤褐色	にぶい赤褐色	長石、角閃石	—
		7	甕	胴部	—	—	—	ナデ	ナデ	明赤褐色	明赤褐色	石英、長石、角閃石	—
		8	甕	胴部	—	—	—	ナデ	摩耗	赤褐色	明赤褐色	石英、長石、角閃石	竹管文
		9	高坏	坏部	—	—	—	ミガキ	ミガキ	赤	にぶい褐色	石英、長石、角閃石	赤色顔料
		10	鉢	底部	—	5	—	ナデ	工具ナデ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	石英、長石、角閃石	—
		11	ミニチュア	胴～底部	—	3	—	ミガキ	ナデ	褐色	褐色	石英、長石、角閃石	—
191	63	1	甕	口縁～胴部	19.6	—	—	ナデ	ナデ	黒褐色	黒褐色	石英、長石	—
		2	甕	胴～底部	—	3.9	—	ミガキ	ナデ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	石英、長石	—
		3	鉢	底部	9.9	4.7	5.6	ナデ	ナデ	褐色	褐色	石英、長石、角閃石	—
		4	高坏	坏部	—	—	—	ミガキ	ナデ	赤	にぶい褐色	石英、長石	赤色顔料



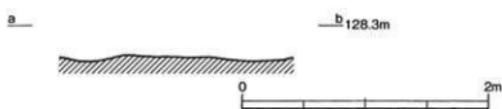
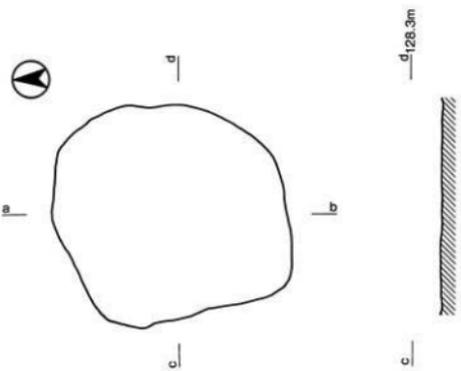
第190図 63号竖穴住居跡



第191図 63号竖穴住居跡出土遺物



第192図 不明遺構 1



第193図 不明遺構 2

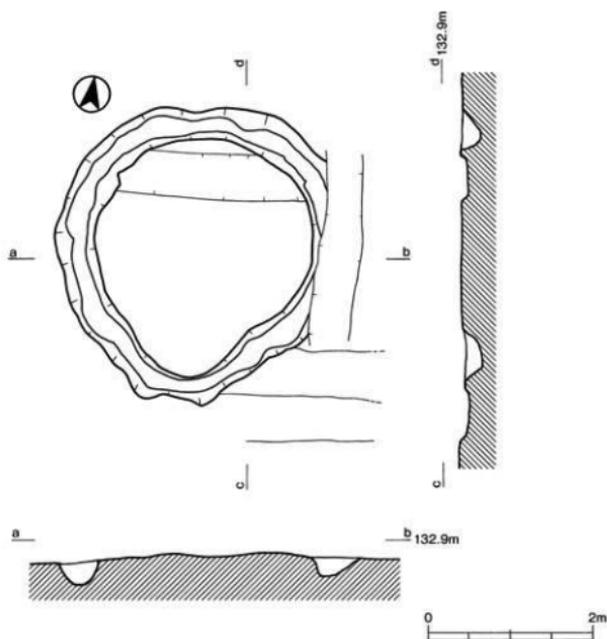
2は壺形土器である。外面はミガキによる調整である。3は鉢形土器である。内外面ともナデで調整されており、指オサエの痕がある。胎土には石英、長石、角閃石を含んでいる。4は高坏の坏部の底部付近である。外面の調整は、ミガキで外面には赤色顔料が塗布されている。

不明遺構 1 (第192図)

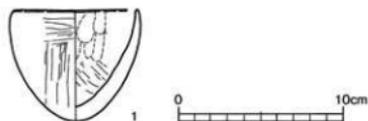
C-14区, IIIa層で検出された。平面形は長軸約168cm×短軸約160cmの楕円形である。IIIa層上面で埋土の色の違いを確認し、南北、東西方向にベルトを設定して掘り下げを行った。この遺構は掘り下げていくと所々ブロック状に硬い土が散在していた。検出面から床面までの深さは、9cmと比較的浅い。平面形や断面の様子から考えて、この遺構を不明遺構として報告する。

不明遺構 2 (第193図)

C-15区, IIIa層で検出した。平面形は長軸約190cm×短軸約175cmのやや隅丸方形であるIIIa層上面で埋土の色の違いを確認し、南北、東西方向にベルトを設定して掘り下げを行った。この遺構も不明遺構 1と同様に掘り下げていくうちに所々ブロック状に硬く締まった土が散在していた。検出面から床面までの深さは、4cmと浅い。平面形や断面の様子から考えて、この遺構を不明遺構として報告する。



第194図 1号円形周溝状遺構



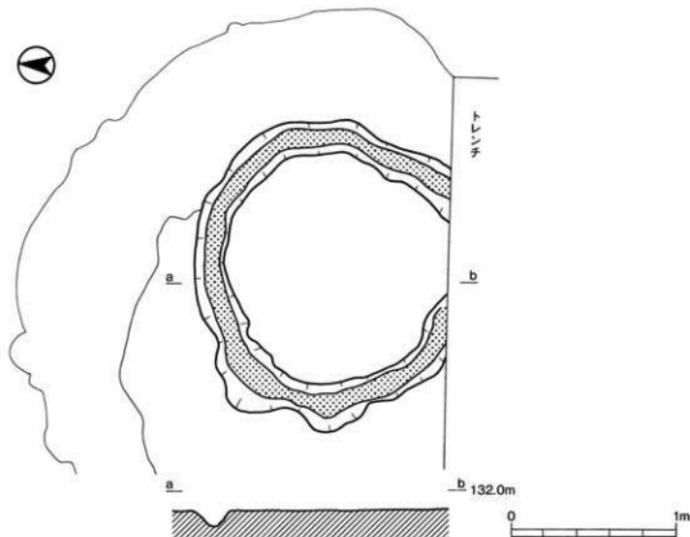
第195図 1号円形周溝状遺構出土遺物

1号円形周溝状遺構(第194図)

C-21区, IIIa層で検出された。直径約3.45mを測る真円の平面形である。周溝部分の幅は、約40cm~50cm, 周溝の深さは約25cmのU字形の掘り込みをもつ。東側の一部は、中世の溝5号に切られており、北側の一部はイモ穴によって切られている。この遺構の中からは、成川式土器が出土し、接合作業の結果、1点を図化した。

1号円形周溝状遺構出土遺物(第195図 1)

1は鉢形土器の完形である。器面調整は、外面はヘラナデであり、内面には指オサエの痕が見られる。底部から口唇部に向かって内湾していく器形をしており、器壁は薄い。外面の色調は明褐色である。



第196図 2号円形周溝状遺構



第197図 2号円形周溝状遺構出土遺物

2号円形周溝状遺構 (第196図)

C-20区, III a層で検出された。直径約390cmを測る真円の平面形である。周溝部分の幅は、約30cm~50cm, 周溝の深さは約30cmのU字形の掘り込みをもつ。南側の一部は、確認トレンチで切られている。この遺構の中からは、成川式土器の土器片が出土し、3点を図化した。

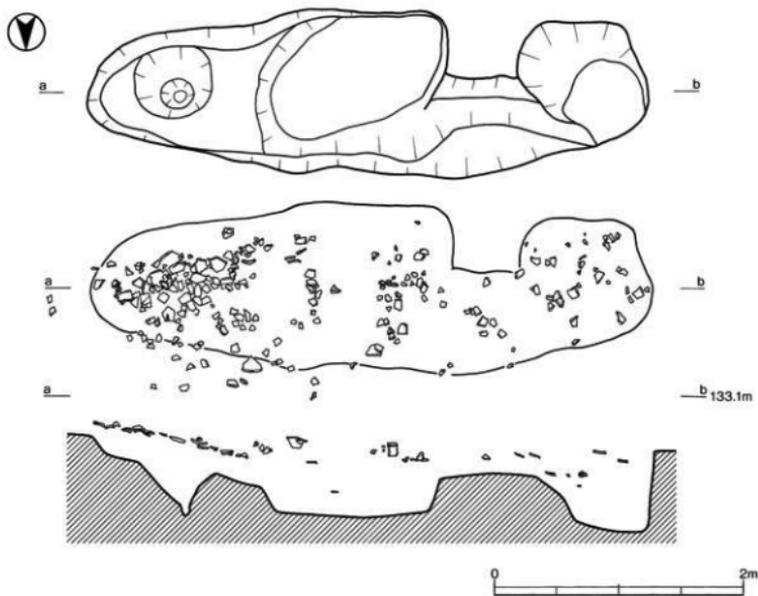
2号円形周溝状遺構出土遺物 (第197図 1~3)

1は甕形土器の肩部である。外面に絡縄突帯を施している。2は中空のあげ底底部である。

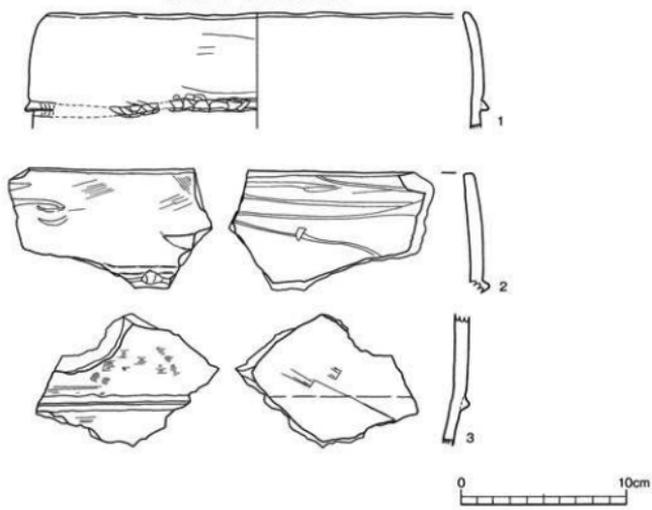
3は壺形土器の口縁部である。口唇部は平坦である。頸部外面が外側にはねるような形状を呈しており、調整はヘラによるナデである。

第51表 円形周溝状遺構出土遺物観察表

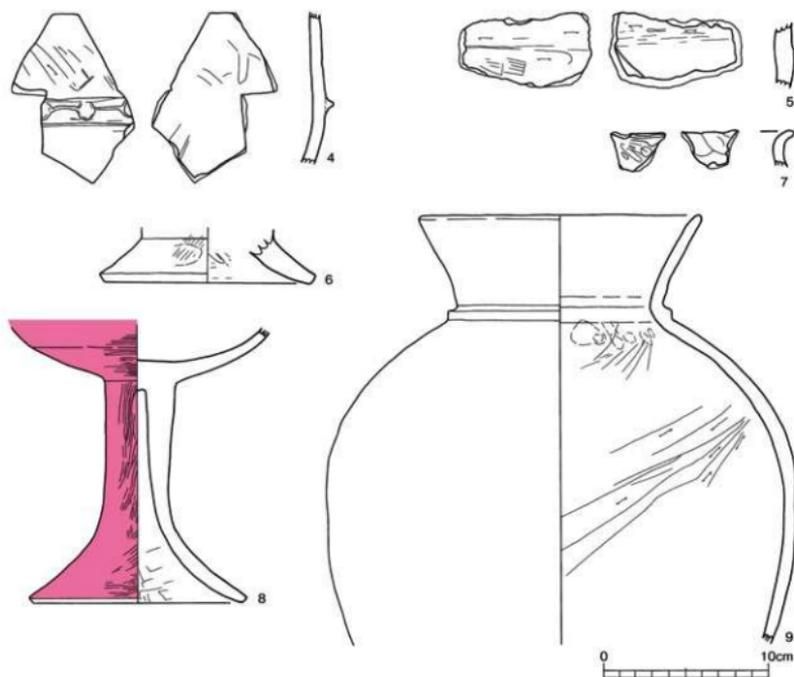
検出	遺構	番号	器種	部位	口径			調整・文様		色調		胎土	備考
					OK	OK	OK	外面	内面	外面	内面		
195	1号円形	1	鉢	底部	6	-	6	ヘラナデ	指付H	明褐色	黄褐色	長石・石英	-
197	2号円形	1	甕	肩部	-	-	-	ナデ	ナデ	にひい燈	にひい燈	長石・石英	結晶状帯
		2	壺	底部	-	-	-	ナデ	ナデ	明赤褐色	黄褐色	長石・石英・内閉石	-
		3	壺	口縁部	-	-	-	ヘラナデ	ナデ	褐色	褐色	長石・石英	-



第198図 古墳時代土坑 1



第199図 古墳時代土坑 1 出土遺物 (1)



第200図 古墳時代土坑1出土遺物(2)

土坑

本遺跡から、古墳時代のものと思われる土坑が2基検出された。

古墳時代土坑1(第198図)

B-19区、Ⅲa層で検出された。土器溜りである。掘り下げていく過程で、埋土の色の違いが確認された。埋土観察のベルトを設定し、埋土を掘り下げていくと、大量の土器が出土してきた。出土の仕方は、多数の小片遺物が折り重なるように出土してきた。この中から、接合作業を経て9点を図化した。

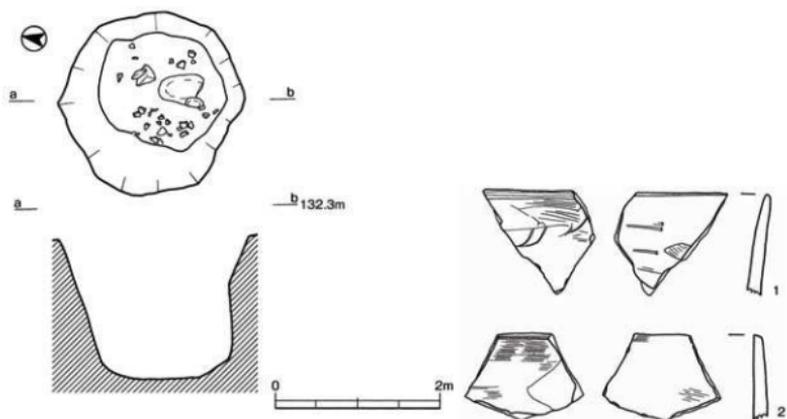
古墳時代土坑1出土遺物(第199図・200図 1~9)

1・2は甕形土器の口縁部である。胴部に一条の突帯を有する。突帯の形状は、指つまみである。

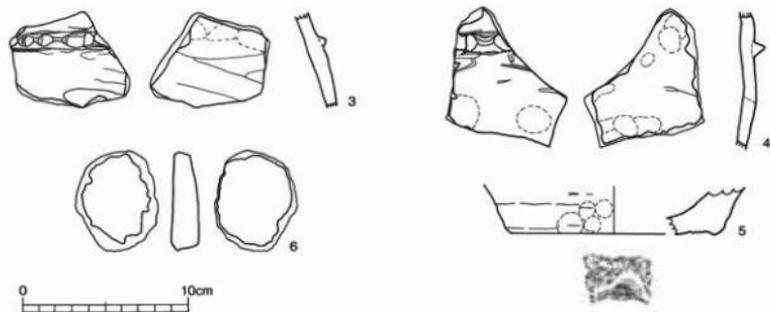
3~5は甕形土器の胴部である。6は甕形土器の底部である。7は壺形土器の口縁部である。8は高坏である。坏部が欠損している。表面の調整はミガキで、赤色顔料が塗られている。9は壺形土器の口縁部から胴部である。頸部にヘラ刻みの突帯を有している。

古墳時代土坑2(第201図)

C-22区、Ⅲa層で検出された。形状は直径約1mの円形を呈し、検出面からの深さは約110cmを測る。埋土は暗オリーブ褐色土である。この土坑から成川式の土器片が多数出土し、接合作業を経て6点を図化した。



第201図 古墳時代土坑 2



第202図 古墳時代土坑 2 出土遺物

古墳時代土坑 2 出土遺物 (第202図 1~6)

1 は甕形土器の口縁部である。調整はナデである。2 は甕形土器の口縁部である。3・4 は壺形土器の胴部である。5 は鉢形土器の底部であり、6 は円盤状土製品である。

第52表 古墳土坑内出土遺物観察表

神宮番号	遺構	遺物番号	器種	部位	口径			調整・文様		色澤		胎土	備考
					cm	mm	mm	外面	内面	外面	内面		
199	土坑 1	1	甕	口縁部	25.8	—	—	ナデ	ナデ	明褐色	明褐色	長石・石英	—
		2	甕	口縁部	—	—	—	ナデ	ナデ	明褐色	明褐色	長石・石英	—
		3	甕	胴部	—	—	—	ナデ	ナデ	明褐色	明褐色	長石・石英	—
		4	甕	胴部	—	—	—	ナデ	ナデ	明褐色	明褐色	長石・石英	—
		5	甕	胴部	—	—	—	ナデ	ナデ	明褐色	明褐色	長石・石英	—
		6	甕	底部	—	13.6	—	ナデ	ナデ	明褐色	明褐色	長石・石英	—
		7	壺	口縁部	—	—	—	ナデ	ナデ	明褐色	明褐色	長石・石英	—
		8	高坪	坪一胴部	—	13.6	—	ミガキ	ミガキ	赤	赤	長石・石英	赤色顔料
		9	壺	口縁部一胴部	19.6	—	—	ナデ	ナデ	黄褐色	黄褐色	長石・石英	—
202	土坑 2	1	甕	口縁部	—	—	—	ナデ	ナデ	明褐色	明褐色	長石・石英	—
		2	甕	口縁部	—	—	—	ナデ	ナデ	明褐色	明褐色	長石・石英	—
		3	甕	胴部	—	—	—	ナデ	ナデ	明褐色	明褐色	長石・石英	—
		4	壺	胴部	—	—	—	ナデ	ナデ	明褐色	明褐色	長石・石英	—
		5	鉢	底部	—	12	—	ナデ	ナデ	明褐色	明褐色	長石・石英	—
		6	円盤状土製品	—	—	—	—	—	—	明褐色	明褐色	長石・石英	—

溝状遺構

Ⅲa層で、古墳時代のものと思われる溝状遺構が12条検出された。掘り下げてみると硬化面が明瞭に残存しているものがあり、また竪穴住居の横に位置しているものがあった。さらに中には、硬化面のみを確認したものもある。

古墳時代溝 1 (第203図)

B-3・4区、Ⅲa層で検出された。B-3区のⅢ層を少し掘り下げたところで溝状に伸びる硬化面を確認し、溝状遺構として報告する。幅約80cm、検出面からの深さ約20cmの溝である。位置は、等高線上に沿っている。西側は、削平を受けており、検出することはできなかった。この溝からは出土した遺物はなかった。

古墳時代溝 2 (第203図)

B-6区、Ⅲa層で検出された。幅約40cm、検出面からの深さ約20cmの溝である。B-6区を掘り下げていくと溝状に伸びる埋土の色の違いを確認した。埋土観察のベルトを残して掘り下げを行った。この区の周辺は、圃場整備により上の層は削平を受けている。この溝は掘り込み部分の確認でき、硬化面も明瞭に残存していたので、溝状遺構として報告する。出土遺物はなかった。

古墳時代溝 3 (第203図)

B・C-6区、Ⅲa層で検出された。幅60cm、検出面からの深さ約20cmの溝である。この区の周辺は圃場整備により、上の層は削平を受けており、溝状に伸びる硬化面のみを確認することができた。周囲に類似した溝状遺構が広がっているので、この遺構も溝状遺構として報告する。出土遺物はなかった。

古墳時代溝 4 (第203図)

B-7区、Ⅲa層で検出された。幅40cmの溝である。東側の端と西側の端は、削平を受けており、確認することはできなかった。検出された場所には、人為的な掘り込み部を明瞭に確認することができた。

古墳時代溝 5 (第203図)

C-7区、Ⅲa層で検出された。幅40cm、検出面からの深さ約20cmの溝である。この区の周辺は削平を受けており、溝の一部分しか確認することができなかった。位置及び形状から、先述の「古墳時代溝4」につながっていくのではないかとと思われるが、東側が大部分削平を受けており、プランが確認できないので、別の溝として報告する。

古墳時代溝 6 (第204図)

B・C-12区、Ⅲa層で検出された。幅50cmの溝である。確認トレンチにより削平を受けている。

古墳時代溝 7 (第204図)

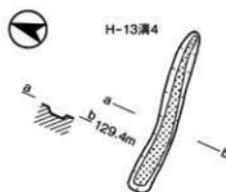
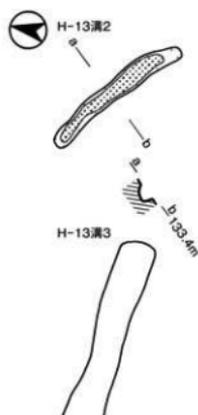
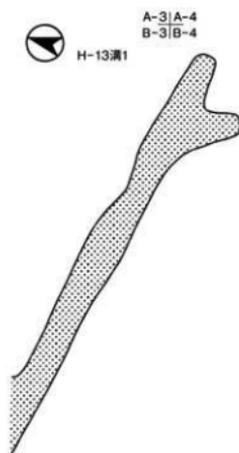
C-16区、Ⅲa層で検出された。幅約40cmの溝である。一部分しか検出されなかった。

古墳時代溝 8 (第204図)

B・C-16区、Ⅲa層で検出された。幅50cmの溝である。この遺構は溝7の隣接した南側で検出されており、形状は「古墳時代溝7」に酷似している。

古墳時代溝 9 (第205図)

A~C-12~14区にかけて検出された。幅平均約130cm、最大幅は約200cmを測る。検出面から



第203図 古墳時代溝状遺構(1)

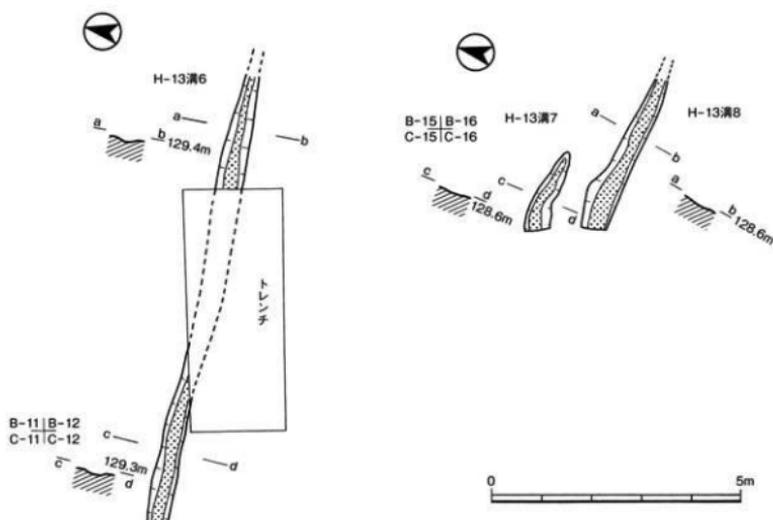
の深さ約20cmの溝である。埋土を掘り下げていく過程で、色の違う溝状のプランを確認した。埋土観察のベルトを設定して中央部分から掘り下げていった。約15cm程度掘り下げた所で、硬化面が明瞭に残存していることが確認できた。明瞭な人為的な掘り込み部も確認できた。この溝の位置は、等高線に沿って位置している。

古墳時代溝10 (第206図)

B~D-23区、Ⅲa層で検出された。幅約150cmの溝である。埋土を掘り下げていく過程で、色の違う溝状の平面プランが確認された。上部は削平を受け、硬化面のみを確認することができた。この溝はこの周辺で検出された竪穴住居跡群の中に位置しており、東側の竪穴住居跡と西側の竪穴住居跡とを結ぶ形で位置している。これらのことから、この住居跡に伴う何らかの施設になる可能性もあると考える。

B-7|B-8
C-7|C-8

A-11|A-12
B-11|B-12



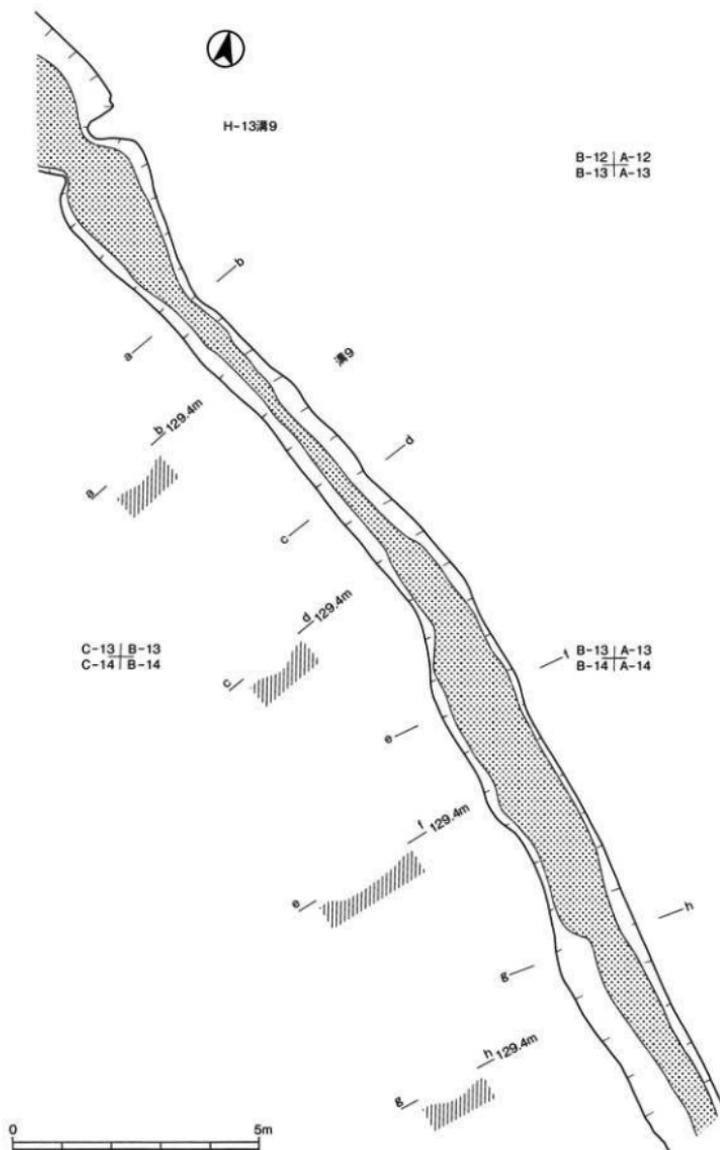
第204図 古墳時代溝状遺構(2)

古墳時代溝11 (第207図)

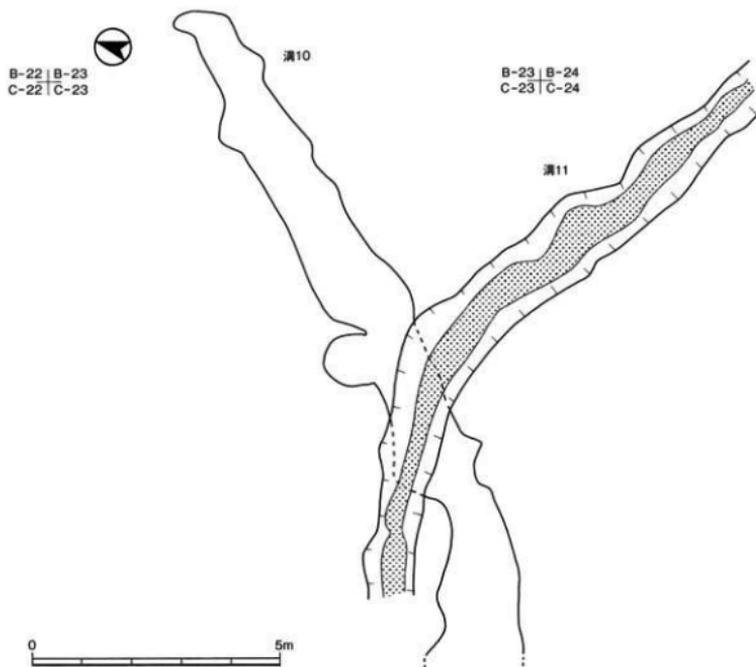
B～D-23～25区のⅢa層で検出された。幅平均約150cm検出面からの深さ約20cmの溝である。埋土を掘り下げていく過程で、色の違う溝状の平面プランが確認された。掘り下げは、埋土観察のベルトを設定し掘り下げていった。約18cm程度掘り下げた所で硬化面を確認することができた。D-23区から東側に地形に沿って向かって伸びてその後、C-25区でまた地形に沿って西側に大きく曲がっている。この周辺には、竪穴住居跡が検出されているので、これらの住居跡に伴う施設になる可能性もあると考える。出土遺物は、成川式の土器片が出土し、接合作業を経て5点を図化した。

古墳時代溝12 (第207図)

B・C-25区、Ⅲa層で検出された。幅約150cmの溝である。掘り下げていく過程で、色の違う溝状の平面プランが確認された。この溝の東側は、溝11に交わる。このようなことから、溝11と溝12は、同じ時期のものであると考える。



第205図 古墳時代溝状遺構(3)



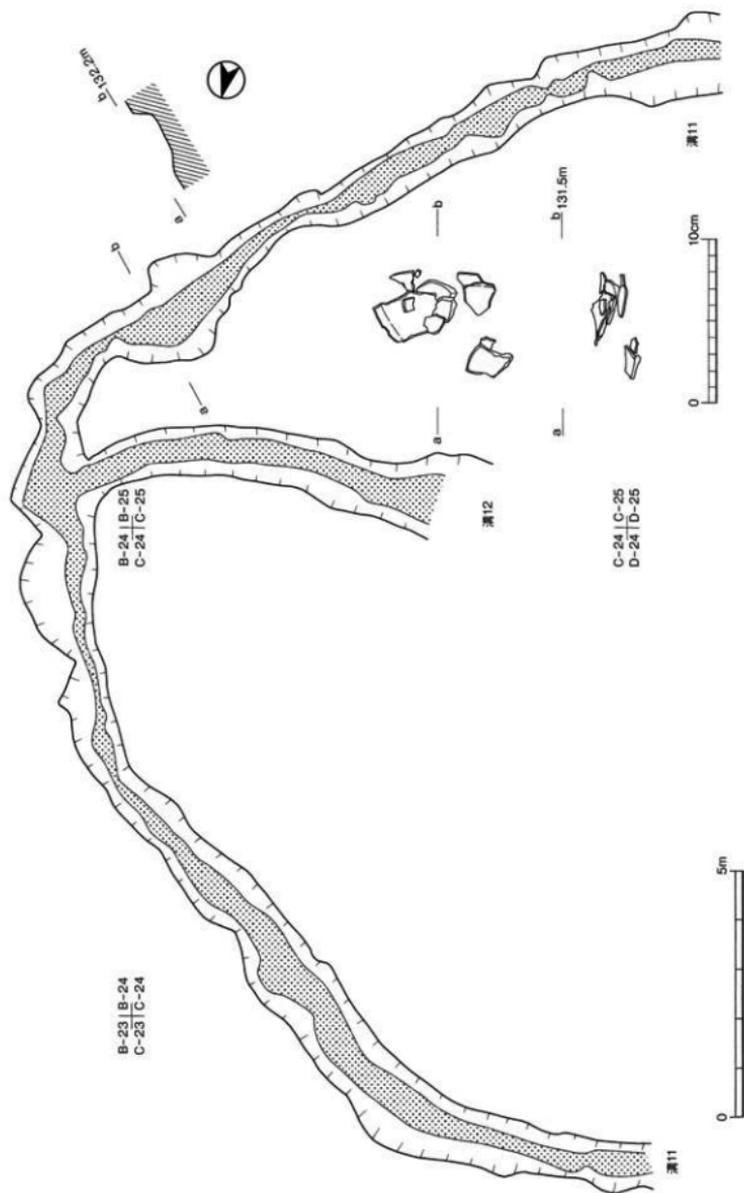
第206図 古墳時代溝状遺構(4)

溝状遺構出土遺物(第208図 1~5)

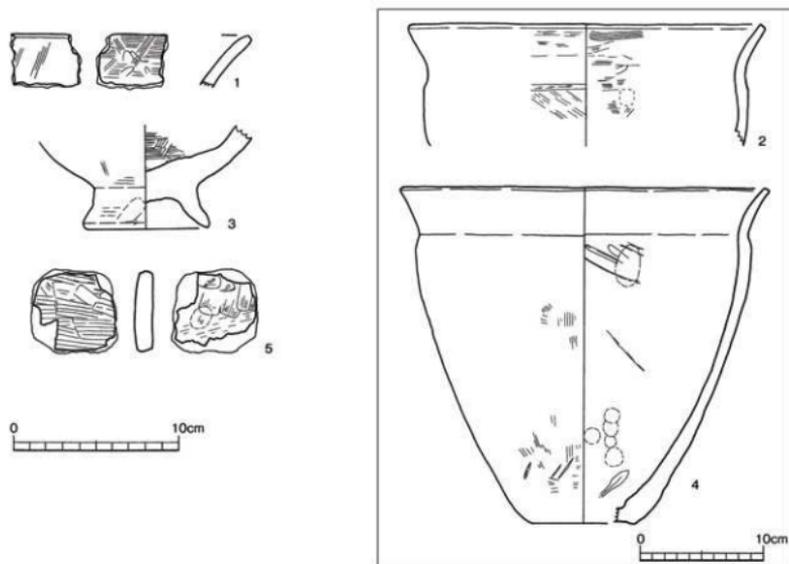
1は甕形土器の口縁部である。口唇部は平坦である。2は甕形土器の口縁部~胴部である。頸部で、内側にしまり口縁部はやや外反する。器形をしている。3は甕形土器の底部である。しかし、外面の調整が丁寧なナデで調整されており、内面全般にはススが附着しているので、蓋の可能性もある。4は甕形土器の完形である。口唇部は、平坦であり、頸部で内側にしまり、口縁部は外側にやや外反する器形である。5は円盤状土製品である。表面の縁辺部が面取りされている。

第53表 古墳時代溝内出土遺物観察表

検出	遺構	番号	器種	部位	口径			調整・文様		色調		胎土	備考
					口径	底径	器底	外面	内面	外面	内面		
					cm	cm	cm						
208	溝状遺構	1	甕	口縁部	—	—	—	ナデ	工具ナデ	にぶい黄緑	黄緑	長石・石英	—
		2	甕	口縁~胴部	29	—	—	ナデ	ナデ・段オサエ	にぶい黄緑	にぶい黄緑	長石・石英	—
		3	甕	底部	—	7.4	—	ヘラナデ	ナデ	明褐色	黒	長石・石英	—
		4	甕	完形	29	8.5	30.2	ナデ	ナデ	にぶい黄	にぶい黄	長石・石英	—
		5	円盤状土製品	—	—	—	—	ハケメ	ナデ	にぶい黄緑	にぶい黄	長石・石英	—



第207図 古墳時代溝塚遺構(5)



第208図 古墳時代溝状遺構内出土遺物

2 古墳時代の包含層出土遺物

甕形土器

甕形土器は口縁部に特徴があり3類に分けられる。

甕形土器第1類(第209図 1~8)

甕第1類は頸部で締めり、口縁部が外反するものである。

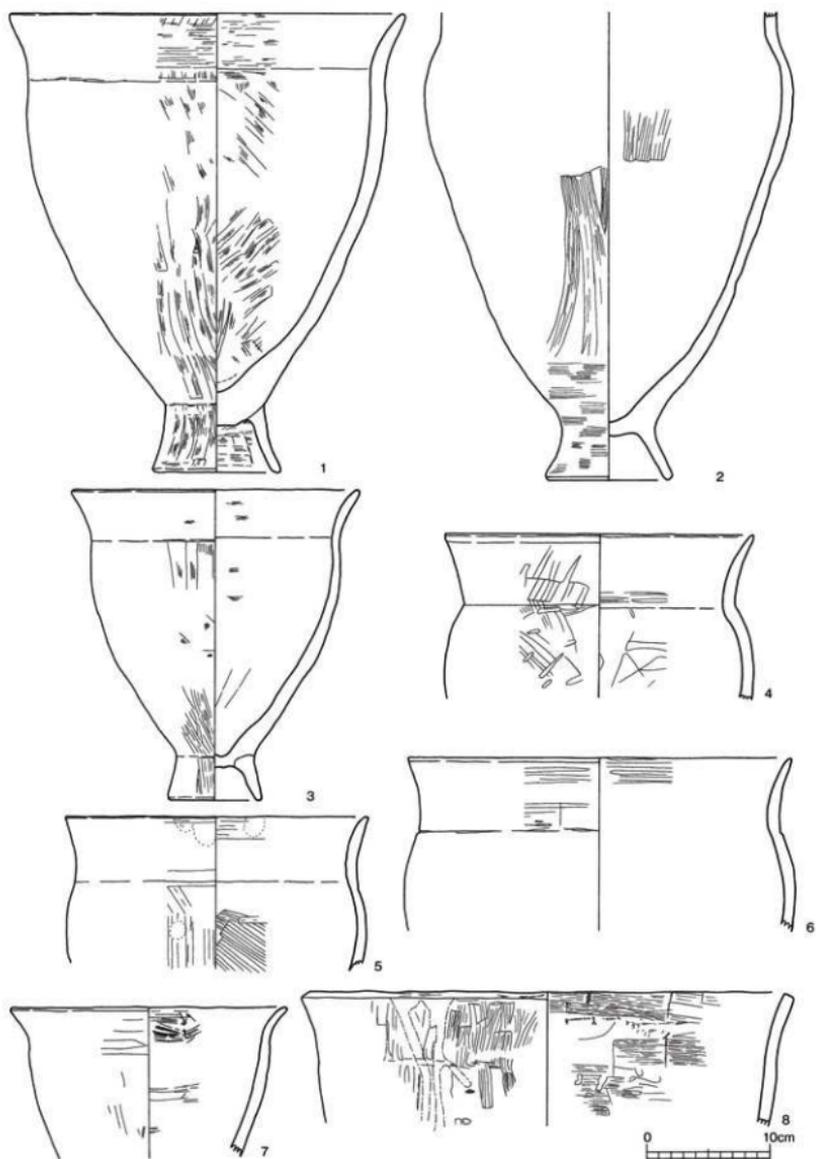
1は器壁が厚い大型の甕形土器である。器形は口縁部が外反し、頸部でやや締めり、肩部はやや張っている。胴部の張りは少なく、底部は尖底に脚を貼り付けた形である。脚部はやや開き気味である。なお、頸部の内面は微かに稜線が認められる。外面の器面調整は口縁部が頸部の所からヘラ状施工具で口唇部に向けて掻き上げ後にヨコナデを施している。肩部から底部及び脚部はタテナデを行っている。内面は口縁部がヨコナデで、底部から斜位にナデを行っている。脚部の内面はヨコナデである。色調は外面が暗茶褐色で、内面は茶褐色の中に黒斑点がみられる。なお、口縁部には煤が付着しており、一部黒色化している。胎土は細石を含み石英、長石、角閃石を含んでいる。2は器壁が厚い大型の甕形土器である。器形は口縁部が外反し、頸部は大きく締めり、肩部は張っている。胴部の張りは少なく、底部は尖底に脚を貼り付けた形である。脚部は開き気味である。外面の器面調整は口縁部が頸部の所からヘラ状施工具で口唇部に向けて掻き上げ後にヨコナデを施している。肩部から底部及び脚部はタテナデを行っている。内面は口縁部がヨコナデで、底部から斜位にナデを行っている。脚部の内面はヨコナデである。色調は外面が暗茶褐色で、内面は茶褐色の中に黒斑点がみられる。胎土は細石を含み石英、長石、角閃石を含んでいる。3は器壁が薄い

甕形土器である。器形は口縁部が外反し、頸部でやや締まり、肩部はやや張っている。胴部の張りは少なく、底部は尖底に脚を貼り付けた形である。脚部はやや開き気味でやや低い。外面の器面調整は口縁部が頸部の所からヘラ状施工具で口唇部に向けてナデ上げ後にヨコナデを施している。肩部から底部及び脚部はタテナデを行っている。内面は口縁部がヨコナデで、底部から斜位にナデを行っている。脚部の内面はヨコナデである。色調は外面が赤茶褐色で、内面が黒褐色である。なお、口縁部には煤が付着しており、肩から口縁部は黒色化している。胎土は石英、長石、角閃石を含んでいる。4は口縁部が外反し、頸部で大きく締まり、肩部は張り、胴部の張りも大きい。なお、内面の頸部は丸みが認められる。外面の器面調整は口縁部が頸部の所からヘラ状施工具で口唇部に向けてナデ上げ後にヨコナデを施している。肩部及び胴部は斜位にナデを行っている。内面は口縁部及び胴部がヨコナデで調整を行っている。色調は内外面とも茶褐色で、茶褐色の中に黒斑点がみられる。なお、口縁部には煤が付着しており、一部黒色化している。胎土は石英、長石、角閃石を含んでいる。6は口縁部が外反し、頸部で大きく締まり、肩部が張り、胴部の張りも大きい。なお、内面の頸部は丸みが認められる。外面の器面調整は口縁部が頸部の所からヘラ状施工具で口唇部に向けてナデ上げ後にヨコナデを施している。肩部及び胴部は横位にナデを行っている。内面は口縁部及び胴部がヨコナデで調整を行っている。色調は内外面とも茶褐色で、茶褐色の中に黒斑点がみられる。胎土は石英、長石、角閃石を含んでいる。5は口縁部が外反し、頸部大きく締まり、肩部及び胴部は張っている。なお、内面の頸部は丸みが認められる。外面の器面調整は口縁部が頸部の所からヘラ状施工具で口唇部に向けてナデ上げ後にヨコナデを施している。肩部及び胴部は縦位にナデを行っている。内面は口縁部及び胴部がヨコナデで調整を行っている。色調は外面が暗茶褐色で、茶褐色の中に煤付着による黒褐色がみられる。内面は茶褐色である。胎土は石英、長石、角閃石を含んでいる。7は器壁が薄い甕形土器である。器形は口縁部が外反し、頸部でやや締まり、肩部はやや張っている。胴部の張りは少ない。外面の器面調整は口縁部が頸部の所からヘラ状施工具で口唇部に向けてナデ上げ後にヨコナデを施している。肩部から底部及び脚部はタテナデを行っている。内面は口縁部がヨコナデを行っている。色調は内面が赤茶褐色で、外面が暗茶褐色である。なお、口縁部から胴部には煤が付着しており、一部黒色化している。胎土は石英、長石、角閃石を含んでいる。8は器壁が厚い甕形土器である。器形は口縁部が外反し、頸部でやや締まり、肩部はやや張っている。胴部の張りは少ない。外面の器面調整は口縁部が頸部の所からヘラ状施工具で口唇部に向けてナデ上げを施している。肩部はタテナデを行っている。内面は口縁部がヨコナデを行っている。色調は内面が赤茶褐色で、外面が暗赤茶褐色である。なお、口縁部から肩部には煤が付着しており、一部黒色化している。胎土は石英、長石、角閃石を含んでいる。

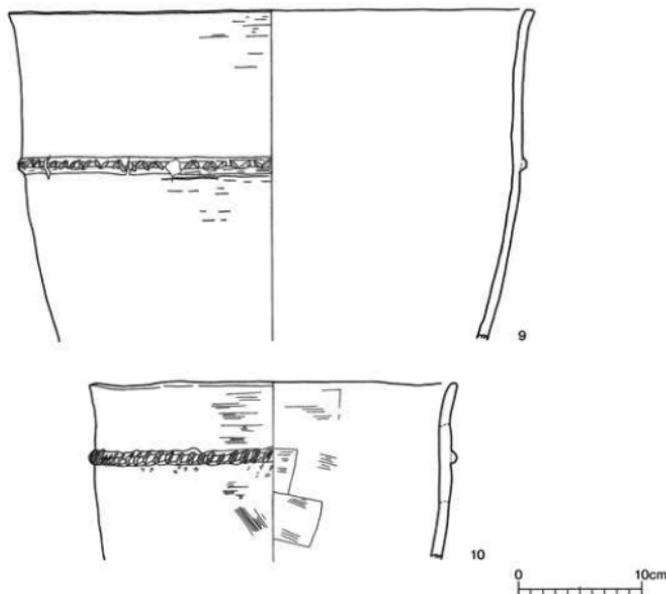
甕形土器第Ⅱ類(第211図 9~10)

甕2類は頸部の締まりが少なく口縁部がやや外反する土器である。

9は大型の甕形土器である。頸部の締まりが少なく、肩部から直向気味に口縁部が外反している。肩部から胴部にかけてはやや膨らみがみられる器形である。頸部には突帯に鋸歯状の刻みを施した突帯文を巡らしている。器面調整は外面口縁部が研磨で胴部がヨコナデである。内面は口縁部がヨコナデで胴部もヨコナデである。色調は外面が暗茶褐色で部分的に茶褐色と黒茶褐色がみられる。内面が赤茶褐色である。胎土は石英、長石、角閃石がみられる。10は頸部の締まりが



第209図 變形土器第I類



第210図 甕形土器第Ⅱ類

少なく、肩部から直向気味に口縁部が外反している。肩部から胴部にかけてはやや膨らみがみられる器形である。頸部には突帯に斜位の刻みを施した突帯文を巡らしている。器面調整は外面がヨコナデで、内面は口縁部がヨコナデで胴部がタテナデである。色調は外面が暗茶褐色、内面が茶褐色と赤褐色である。胎土は石英、長石、角閃石がみられる。

甕形土器第Ⅲ類(第211図～214図 11～44)

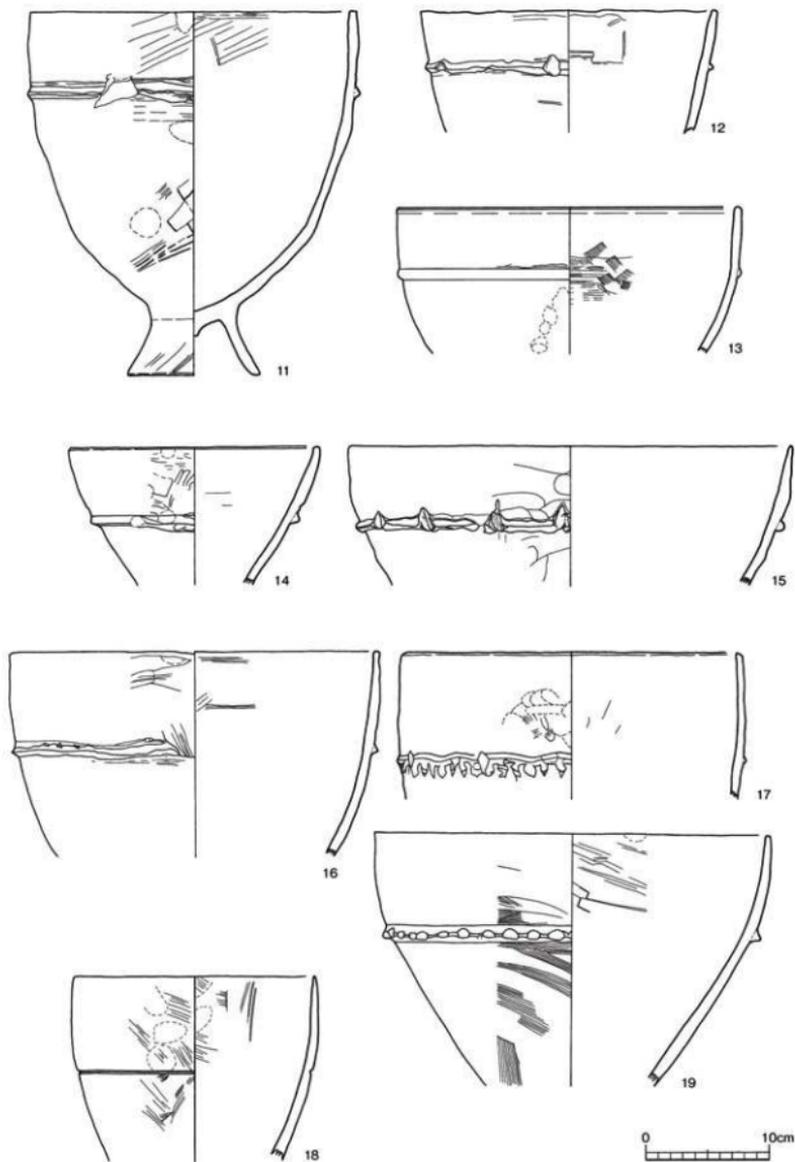
甕3類は頸部の締まりが無く、口縁部が直行や湾曲するタイプである。

11は頸部の締まりが無く、口縁部が内弯気味に直行し、口縁部から胴部まで寸胴気味になり、胴部から底部へは短く曲がっている。底部は尖底に脚部を貼り付けたため尖り部がみられる。脚部は大きく開いている。文様は断面三角突帯を口縁下部に巡らせ斜位の刻みを4方に施している。器面調整は外面口縁部がヨコナデで胴部はタテナデで、脚部はヨコナデで、内面もヨコナデである。色調は外面が暗茶褐色に煤が付着して黒色化し、内面は口縁部にみられる明茶褐色と胴部から底部にみられる煤付着の黒色がある。胎土は石英、長石、角閃石が含まれている。12は口縁部がバケツ状に外向した器形の土器である。文様は指でつぶした指圧痕を施した断面三角突帯を巡らせている。器面調整は内外面ヨコナデである。色調は外面が茶褐色で、内面は口縁部にみられる茶褐色と胴部から底部にみられる煤付着の黒色がある。胎土は石英、長石、角閃石が含まれている。17は口縁部から胴部がバケツ状に直向した器形の土器である。文様は指でつぶした指圧痕を施した断面三角突帯を波状に巡らせている。器面調整は内外面ヨコナデである。色調は外面が茶褐色と黒色で、内面は暗茶褐色がある。胎土は石英、長石、角閃石が含まれている。13は口縁部から胴部がバケツ状に

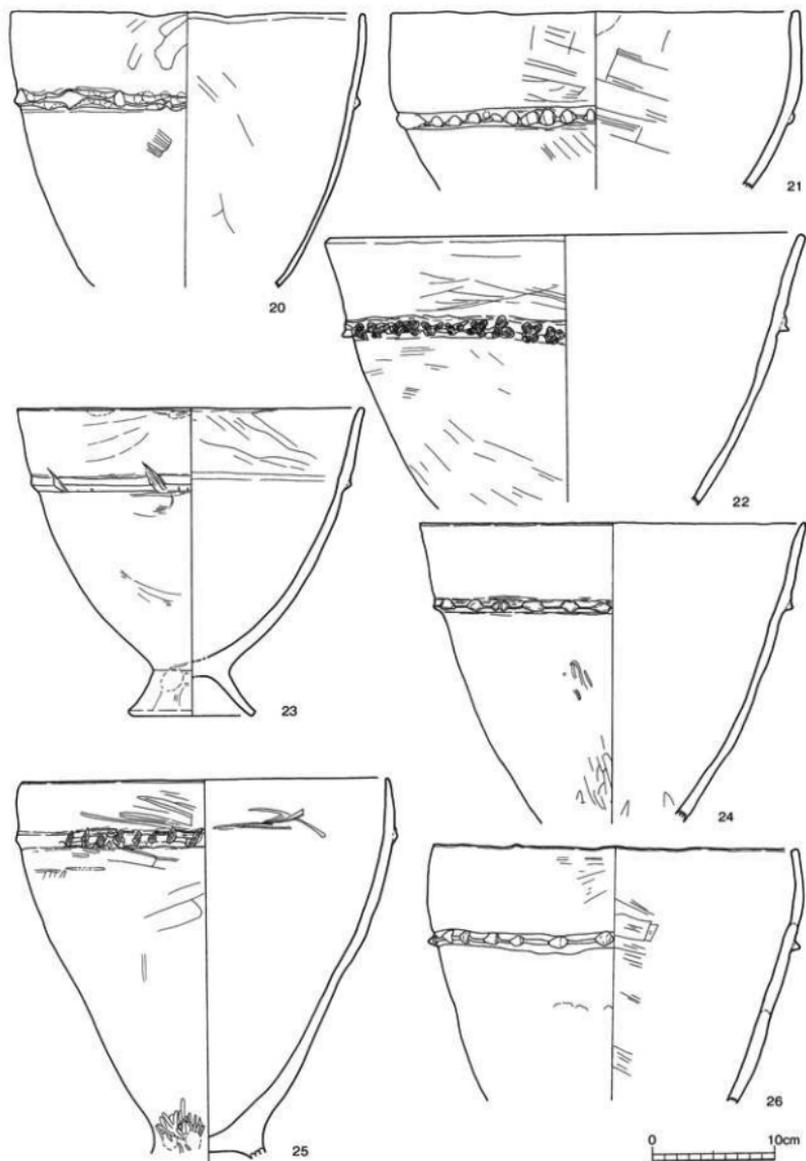
外向した器形の土器である。文様は指でつぶした指圧痕を施した断面三角突帯を巡らせている。器面調整は内外面ヨコナデである。色調は内面が茶褐色で、外面は口縁部にみられる茶褐色と胴部から底部にみられる煤付着の黒色がある。胎土は石英、長石、角閃石が含まれている。15は口縁部から胴部がバケツ状に外向した器形の土器である。文様は筒状施工具で刻みを上部に施した凹文を波状の断面三角突帯を巡らせている。器面調整は内外面ヨコナデである。色調は外面が茶褐色と黒褐色で、内面は口縁部にみられる茶褐色と胴部にみられる黒色がある。胎土は石英、長石、角閃石が含まれている。16は口縁部から胴部がバケツ状に外向した器形の土器である。文様は指でつぶした指圧痕を施した断面三角突帯を巡らせている。器面調整は内外面ヨコナデである。色調は内面が茶褐色で、外面は口縁部にみられる茶褐色と胴部にみられる煤付着の黒色がある。胎土は石英、長石、角閃石が含まれている。14は口縁部から胴部がバケツ状に外向した器形の土器である。文様は指でつぶした指圧痕を施した断面三角突帯を巡らせている。器面調整は内外面ヨコナデである。色調は内外面とも茶褐色である。胎土は石英、長石、角閃石が含まれている。19は口縁部から胴部がバケツ状に外向した器形の土器である。文様は凹圧痕を連続に施した断面三角突帯を巡らせている。器面調整は内外面ヨコナデないしナメナデである。色調は内面が茶褐色で、外面が暗茶褐色である。胎土は石英、長石、角閃石が含まれている。18は口縁部から胴部がバケツ状に外向した器形の土器である。文様は肥厚口縁部の下に沈線を巡らせている。器面調整は内外面ナメナデである。色調は内外面とも茶褐色で、外面に黒斑がある。胎土は石英、長石、角閃石が含まれている。23は口縁部が内湾気味に直行し、口縁部から胴部まで寸胴気味になり、胴部から底部へは短く曲がっている。底部は尖底に脚部を貼り付けたため尖り部がみられる。脚部は大きく開いている。文様は断面三角突帯を口縁下部に巡らせ斜位の刻み間隔を大きく空けて施している。器面調整は内外面の口縁部がヨコナデで胴部はタテナデで、脚部はヨコナデである。色調は外面の口縁部が茶褐色で胴部が黒色の煤が付着して黒色化し、内面は明茶褐色である。胎土は石英、長石、角閃石が含まれている。21は口縁部から胴部がバケツ状に直向した器形の土器である。文様は凹圧痕を連続に施した断面三角突帯を巡らせている。器面調整は内外面ヨコナデないしナメナデである。色調は内面が暗茶褐色で、外面が暗茶褐色に黒色斑がみられる。胎土は石英、長石、角閃石が含まれている。24は口縁部から胴部がバケツ状に外向した器形の土器である。文様は凹圧痕を連続に施した断面三角突帯を巡らせている。器面調整は内面がヨコナデないしナメナデである。外面は口縁部がヨコナデで胴部がタテナデである。色調は内面が明茶褐色で、灰黒色の斑点がみられ、外面は口縁部が暗茶褐色で、胴部が煤付着で黒色である。胎土は石英、長石、角閃石が含まれている。20は口縁部から胴部がバケツ状に外向した器形の土器である。文様は凹圧痕を間隔をとって施した断面三角突帯を巡らせている。器面調整は内外面タテナデないしナメナデである。色調は内面が茶褐色に灰黒色の斑点があり、外面は明茶褐色に灰黒色の斑点がある。胎土は石英、長石、角閃石が含まれている。22は口縁部から胴部がバケツ状に外向した器形の土器である。文様は「×」印の刻目文を連続に施した断面三角突帯を巡らせている。器面調整は内外面ヨコナデないしナメナデである。なお、外面は研磨に近い調整をしている。色調は内面が茶褐色で、外面は暗赤茶褐色である。胎土は石英、長石、角閃石が含まれている。

25は口縁部が内湾気味に直行し、口縁部から胴部まで寸胴気味になり、胴部から底部へは短く

曲がっている。底部は尖底に脚部を貼り付けたため尖り部がみられる。文様は幅の広い断面三角突帯を口縁下部に巡らせ斜位の刻み間隔を空けて施している。器面調整は内外面の口縁部がヨコナデで胴部はタテナデで、脚部はヨコナデである。色調は外面の口縁部が茶褐色で胴部が黒色の煤が付着して黒色化し、内面は口縁部にみられる明茶褐色である。胎土は石英、長石、角閃石が含まれている。26は口縁部から胴部がバケツ状に外向した器形の土器である。文様は凹圧痕を連続に施した断面三角突帯を巡らせている。器面調整は内外面ヨコナデないしナナメナデである。色調は内面が明茶褐色と赤茶褐色である。外面の口縁部が暗茶褐色で、胴部は煤付着で黒色である。胎土は石英、長石、角閃石が含まれている。27は口縁部が内弯気味に直行し、口縁部から胴部まで絞気味になり、胴部から底部へは直線的であるがやや内弯している。底部は尖底に脚部を貼り付けたため尖り部がみられる。脚部は大きく開いている。文様は断面三角突帯を口縁下部に巡らせ斜位の刻み間隔を大きく空けて施している。器面調整は外面の口縁部がヨコナデで胴部はナナメナデで、脚部はヨコナデである。内面はヨコナデである。色調は外面の口縁部が明赤茶褐色で、胴部が黒色の煤が付着して黒色化し、内面は口縁部と胴部が明茶褐色で、底部は黒色である。胎土は石英、長石、角閃石が含まれている。28は口縁部から胴部がバケツ状で内弯気味に外向した器形の土器である。文様は布目凹圧痕を連続に施した断面三角突帯を巡らせている。一部には下に垂れ下げた突帯文もみられる。器面調整は内外面ヨコナデないしタテナデである。色調は内面の口縁部が暗茶褐色と胴部以下が黒色である。胴部以下は暗茶褐色である。胎土は石英、長石、角閃石が含まれている。30は口縁部から胴部がバケツ状で内弯気味に外向した器形の土器である。文様はやや間隔のある凹圧痕を連続に施した断面三角突帯を巡らせている。器面調整は内外面ヨコナデないしナナメナデである。色調は内面が茶褐色である。外面は口縁部から胴部が煤付着で黒色である。胎土は石英、長石、角閃石が含まれている。29は口縁部から胴部がバケツ状で内弯気味に外向した器形の土器である。文様は間隔を設け斜位の刻み目痕を5連続に施した断面三角突帯を巡らせている。器面調整は内外面ヨコナデないしナナメナデである。色調は内面が茶褐色である。外面は暗茶褐色が元であるが、口縁部から胴部は煤付着で黒色斑点がみられる。胎土は石英、長石、角閃石が含まれている。32は口縁部から胴部がバケツ状で内弯気味に外向した器形の土器である。文様はやや間隔のある凹圧痕を連続に施した断面三角突帯を巡らせている。器面調整は内外面ヨコナデないしナナメナデである。色調は内面が茶褐色である。外面は口縁部から胴部は黄茶褐色が元であるが、煤付着で黒色斑もある。胎土は石英、長石、角閃石が含まれている。31は口縁部から胴部がバケツ状で内弯気味に外向した器形の土器である。文様はやや間隔のある凹圧痕を連続に施した断面三角突帯を巡らせている。器面調整は内外面ヨコナデないしナナメナデである。色調は内面が茶褐色である。外面は灰茶褐色が元であるが口縁部に黒色斑がみられる。胎土は石英、長石、角閃石が含まれている。33は口縁部から胴部がバケツ状で内弯気味に外向した器形の土器である。文様はやや間隔のある凹圧痕を連続に施した断面三角突帯を巡らせている。器面調整は内外面ヨコナデないしナナメナデである。色調は内面が赤茶褐色である。外面は暗赤茶褐色が元であるが、口縁部から胴部には煤付着の黒色がみられる。胎土は石英、長石、角閃石が含まれている。34は口縁部からバケツ状で内弯気味に外向した器形の土器である。文様は無く肥厚口縁部である。器面調整は内外面ナナメナデである。色調は内外面とも暗茶褐色で、外面



第211图 甕形土器第Ⅲ類(1)



第212図 甕形土器第三類(2)

に煤付着の黒斑がある。胎土は石英、長石、角閃石が含まれている。35は口縁部から胴部がバケツ状で内湾気味に外向した器形の土器である。文様は無く肥厚口縁である。器面調整は内外面指ナデ痕がみられる。色調は内外面とも茶褐色で、外面に煤付着の黒斑がある。胎土は石英、長石、角閃石が含まれている36は口縁部から胴部がバケツ状で内湾気味に外向した器形の土器である。文様は無く肥厚口縁部である。器面調整は内外面ナメナデである。色調は内外面とも暗茶褐色で、外面に煤付着の黒斑がある。胎土は石英、長石、角閃石が含まれている。37は口縁部から胴部がバケツ状で内湾気味に外向した器形の土器である。器面調整は内外面ナメナデである。色調は内外面とも暗茶褐色で、外面に煤付着の黒斑がある。胎土は石英、長石、角閃石が含まれている。38は胴部から底部である。底部の脚は短い。器面調整はナメナデである。色調は外面胴部が茶褐色で、内面と脚部の内側が黒褐色である。41は大きく開いた脚部である。文様は縦れ部に刻み目のある断面三角突帯がみられる。器面調整は胴部が横位、脚部が縦位の研磨がみられる。なお、脚部の内側は横位の研磨である。色調は内外面とも黒褐色と暗茶褐色である。胎土は細石、石英、長石、角閃石がみられる。39は胴部から底部である。底部の脚やや短い。器面調整はナメナデで、脚部はヨコナデである。色調は内外赤茶褐色である。胎土は石英、長石、角閃石が含まれている。40は胴部から底部である。底部の脚は小型である。器面調整はナメナデである。色調は外面胴部が茶褐色で胴部に煤の付着で黒色化した部分がみられる。内面の底部と脚部の内側が黒褐色である。44は胴部から底部である。底部の脚は長く広がっている。器面調整はナメナデである。色調は内外面胴部が暗茶褐色で、脚部は茶褐色である。胎土は石英、長石、角閃石が含まれている。42は胴部から底部である。底部の脚は大きく長い。器面調整は胴部がナメナデで、脚部がヨコナデである。色調は内外面が赤茶褐色で、内面が黒褐色である。胎土は石英、長石、角閃石が含まれている。

壺形土器 (第215図～217図)

45は頸部から大きく開く口縁部をもつ器形の土器である。頸部には布目圧痕のある刻み目を斜位に施した断面三角突帯を巡らしている。器面調整は内外面ともヨコナデである。色調は内面が茶褐色で、外面は暗茶褐色である。胎土は石英、長石、角閃石を含んでいる。52は頸部から大きく開く口縁部をもつ器形の土器である。口唇部は平坦に切り、頸部には凹圧痕のある刻み目を施した断面三角突帯を巡らしている。器面調整は内外面ともヨコナデである。色調は内外面とも暗茶褐色である。胎土は石英、長石、角閃石を含んでいる。51は頸部から直行する口縁部をもつ器形の土器である。頸部には布目圧痕のある刻み目を斜位に施した細めの断面三角突帯を巡らしている。器面調整は内外面ともヨコナデである。色調は内面が茶褐色で、外面は暗灰茶褐色である。胎土は石英、長石、角閃石を含んでいる。46は頸部に布目圧痕のある刻み目を斜位に施した細めの断面三角突帯を巡らしている肩部である。器面調整は内面ヨコナデと指圧痕で、外面が横研磨である。色調は内面が茶褐色で、外面は暗茶褐色である。胎土は石英、長石、角閃石を含んでいる。47は刻み目を斜位に施した断面三角突帯を巡らしている肩部である。器面調整は内面ヨコナデと指圧痕で、外面は頸部が縦研磨で肩部は横研磨である。色調は内面が赤茶褐色で、外面は赤茶褐色に黒褐色の斑点がある。胎土は石英、長石、角閃石を含んでいる。48は頸部から直行する口縁部をもつ器形の土器である。器面調整は内面の頸部が指圧で他はヨコナデである。外面は研磨気味のヨコナデである。色調は内面が黒色で、外面は暗茶褐色である。胎土は石英、長石、角閃石を含んでいる。53は頸部か